

第2章 鎌倉市の維持及び向上すべき歴史的風致

1 鎌倉市における歴史的風致の概要及び分布状況

「歴史的風致」とは、歴史まちづくり法において「地域におけるその固有の歴史及び伝統を反映した人々の活動と、その活動が行われる歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地が一体となって形成してきた良好な市街地の環境」と定義されている。本計画における歴史的風致の設定にあたっては、①地域固有の歴史及び伝統を反映した活動が現在行われていること、②①の活動が歴史上価値の高い建造物及びその周辺の市街地で行われていること、③①の活動と②の建造物及びその周辺の市街地が一体となって良好な市街地環境を形成していることの3つの条件を満たしているものとする。

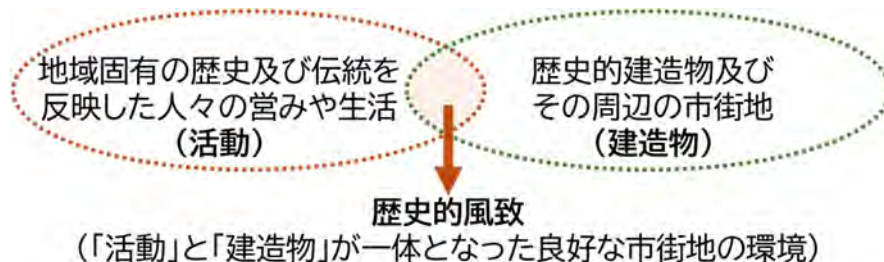


図2-1 歴史的風致の概念図

鎌倉においては、その多くは幕府が置かれた鎌倉地域に点在し、層を成して重なり合う複数の歴史的風致の核となっている。

特に、鎌倉幕府の成立以降、各時代の為政者などによって盛んに建立された社寺は、現在に至るまでの時の流れとともに、「生きている歴史的遺産」として現在も宗教活動が続けており、鎌倉を代表する歴史的風致を形成している。

鎌倉幕府滅亡後の鎌倉の歴史を辿ってみると、康正元年（1455年）以降、鎌倉公方くぼうの足利氏が鎌倉支配を放棄したことなどによってまちは衰退し、かつての中世都市の活気は失われ、静かな農漁村へと変わっていった。今日行われている沿岸漁業は、この頃より続く生業なりわいの一つであり、大漁や海の安全を願う伝統行事には、社寺の存在が欠かせない。

江戸時代に入り、泰平の世が続くようになると、それまで信仰の対象であった鎌倉の社寺は、参詣を兼ねた遊山の対象としても認知されるようになる。鶴岡八幡宮参道の若宮大路は遊山客で大いに賑わいを見せ、若宮大路以外の社寺・眺望点なども名所として人気を博し、周遊観光の経路も定番化していった。明治時代に入ると、周遊観光に関わる鉄道として江ノ電が開通する。

また、明治時代から大正時代にかけて、避暑・避寒・保養の適地として知られるようになった鎌倉では、この地に別荘を構えた人々の中で生まれた価値観が知識、道徳、習慣、作法、生業、芸術といった鎌倉に住む人々の精神や営みに大きな影響を与えるようになり、まちの発展に寄与することとなる。こうして形成された文化や暮らしと、鎌倉の社寺や豊かな自然が織りなす歴史情緒あふれる風景は、多くの人々を魅了した。これらの別荘文化を支えた人々の営みは今も形を変えながら続いており、また別荘建築物が保存・活用されることで、鎌倉の別荘文化を今に伝えている。

戦後、都心近郊のベッドタウンとしての需要が高まると、鎌倉の象徴ともいえる鶴岡八幡宮の裏山で宅地造成の計画が持ち上がり、古都の景観を守るために立ち上がった住民等によって、後に「御谷騒動」と呼ばれる日本初のナショナルトラスト運動が展開された。古都保存法が制定されるきっかけとなったこの市民運動の精神は、現在も市民を中心とした人々の間で引き継がれており、山稜部の緑を保全する活動などが市内各所で展開されている。

本計画において本市が維持向上すべき歴史的風致は、「鎌倉市歴史的風致維持向上計画（第1期）」の6つの歴史的風致に加え、新たに「鎌倉遊山にみる歴史的風致」を追加した、次の7つの歴史的風致とする。

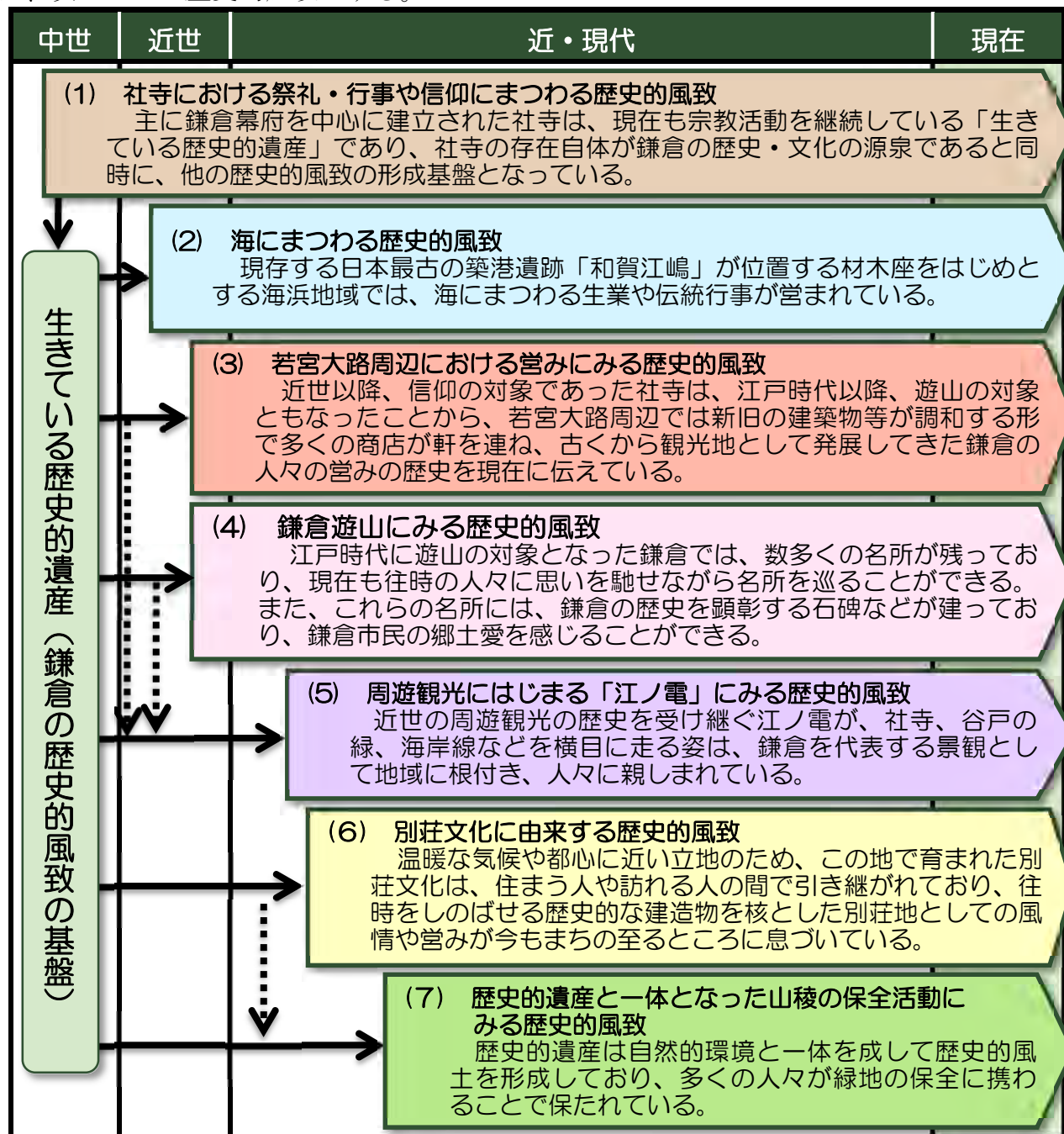
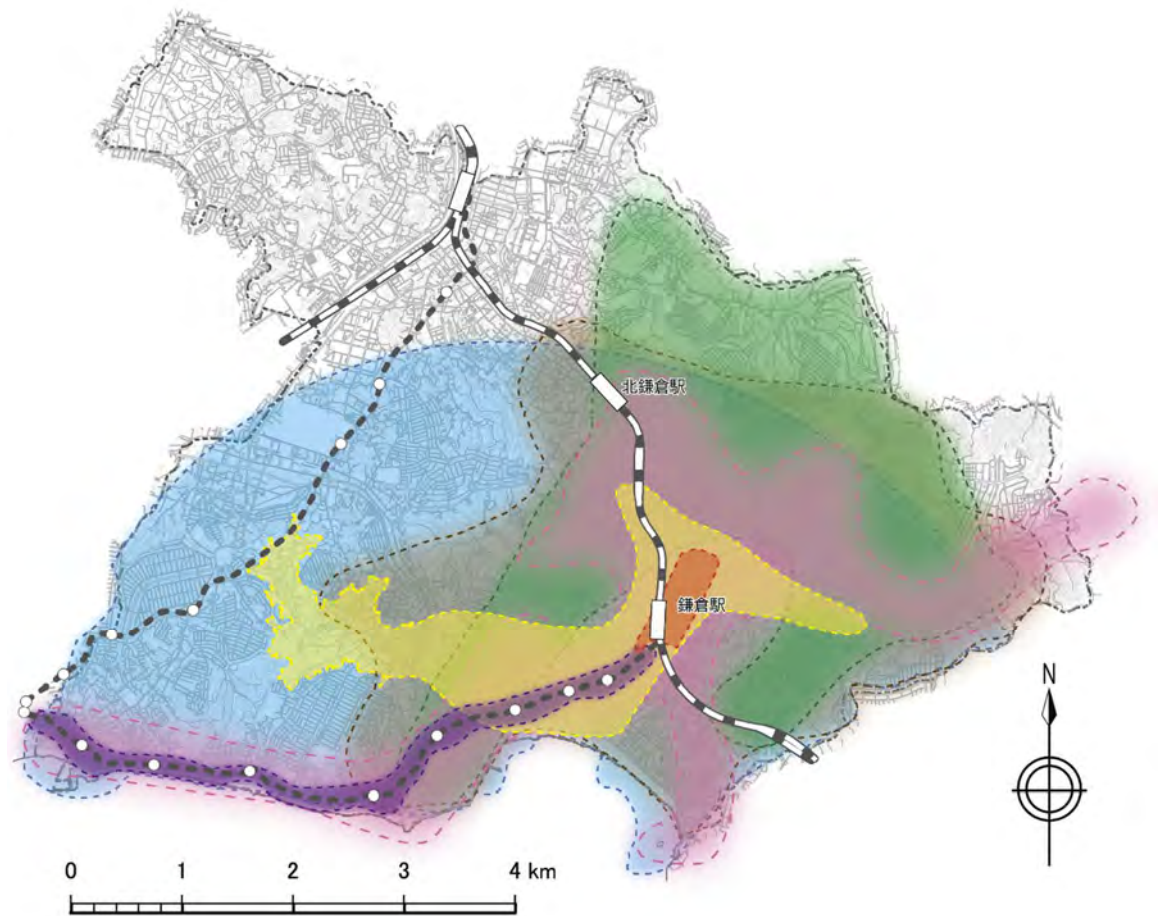


図2-2 歴史的風致の構成



	(1) 社寺における祭礼・行事や信仰にまつわる歴史的風致		(5) 「江ノ電」にみる歴史的風致
	(2) 海にまつわる歴史的風致		(6) 別荘文化に由来する歴史的風致
	(3) 若宮大路沿道の営みにみる歴史的風致		(7) 歴史的遺産と一体となった山稜の保全活動にみる歴史的風致
	(4) 鎌倉遊山にみる歴史的風致		市域境界

図2-3 歴史的風致の範囲

2 鎌倉市の維持及び向上すべき歴史的風致

(1) 社寺における祭礼・行事や信仰にまつわる歴史的風致

ア はじめに

鎌倉時代、幕府及びその関係者は、神仏を敬い政治理念の中核にそれを据えるという宗教政策を進めた。そしてその具現化のため数多くの社寺を造営し、社寺が武家文化の創出及び発展の主な拠点となった。

特に禅宗については、鎌倉幕府の主導によって様々な面で積極的に導入され、禅宗寺院は日本における中国文化の発信源として大いに繁栄し、その後様々な歴史の変遷の中で、日本独自の「わび・さび」と呼ばれる美意識の醸成につながっていった。また、鎌倉時代以降の歴代武家政権も、鎌倉を武家政権発祥の聖地として手厚く保護した。

イ 鎌倉と信仰の関わり

山谷に囲まれた地形の鎌倉は、昔から信仰の地として祭礼が行われていた。源頼朝が鎌倉に幕府を開いたことで、鶴岡八幡宮を中心とした都市構造が整備され、社寺は権威を示すとともに政治的象徴となった。同時に禅宗をはじめとする新仏教の寺院が多数建立され、武士や庶民の精神的な支えとしての役割を担った。

その後、鎌倉は政治の地としての役割を終え、社寺は信仰の対象であると同時に観光名所として発展した。

さらに時代の^{へんせん}変遷を経て、信仰の役割や社寺と住民の関係も変化するが、社寺及び境内地は現在も鎌倉における文化を継承する場所でありながら、地域の独自性を発信する場所として、市民の憩いの空間、場所となっている。

現在、鎌倉には約 160 もの社寺があるが、それらの寺院も歴史的な背景から創建時期や宗派は様々である。

市内に点在する社寺の境内やその周辺では年間を通じて各種祭礼や伝統行事が行われ、市民や、信者や参拝者などを問わず数多くの人々が参加している。

鎌倉では商店や住宅が建ち並ぶ市街地の中、閑静な谷戸の奥などいたるところに社寺があり、社寺のある風景は境内地やその周囲の市街地で催される祭礼・行事やその他の活動を通じ、市民生活に溶け込み、息づいている。そして、時代ごとに意味を変えながら、住民や来訪者の心を捉える信仰の場として現在まで引き継がれている。

そうしたことを通じ、鎌倉の独自性、歴史的風土や古都としての雰囲気や魅力を大いに感じることができる。

ウ 建造物

鎌倉における社寺の全てをここで取り上げることはできないため、その一部について示していく。

(ア) 歴史的風致の形成を担っている建造物

a 神社

(a) 鶴岡八幡宮

鶴岡八幡宮の歴史は、源頼義が康平6年（1063年）に石清水八幡宮を鎌倉由比郷^{かんじょう}に勧^{かん}請^{じょう}したことにはじまる。その後、鎌倉幕府を樹立した源頼朝が、鎌倉入りした治承4年（1180年）に、先祖が勧請したこの由比若宮（元八幡）を、現在の位置に移して造営した。祭神は応神天皇、比売神、神功皇后の三柱からなる八幡神で、宇佐神宮（大分県宇佐市）、石清水八幡宮（京都府八幡市）に^{はこぎきぐう} 菅崎宮（福岡県福岡市）、鶴岡八幡宮のいずれかを加えて日本三大八幡に数えられる。

境内には、上宮、摂社若宮、丸山稻荷社、白幡神社、旗上弁財天社、祖霊社及び今宮等の社殿の他、源平池などがある。境内の配置は、天正19年（1591年）成立の『鶴岡八幡宮指図』及び享保17年（1732年）成立の『鶴岡八幡宮境内絵図』などからその変遷を知ることができる。建久2年（1191年）に新たな社殿の造営を行い、現在のような上下両宮の構成となったが、天正19年（1591年）成立の『鶴岡八幡宮指図』には、経蔵や御本地堂、鐘楼が、『鶴岡八幡宮境内絵図』には大塔や護摩堂が描かれており、神仏習合時代の様子を見て取ることができる。

江戸幕府の将軍家徳川氏は、自らを源氏の末裔と位置付けたため、鎌倉を聖地として手厚く保護し、寛永元年（1624年）には第二代将軍徳川秀忠が上宮、摂社若宮ともに規模形式を一新した^{まつえい} 造替^{つくりか}えを行ったことを初めとして、その後も、再建や定期的な修造などを



写真2-1 鶴岡八幡宮 上空

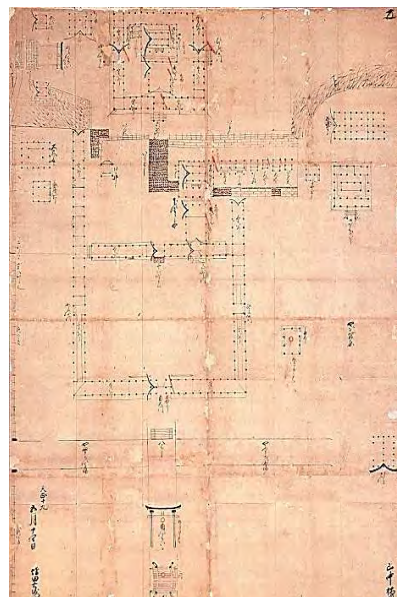


図2-4 鶴岡八幡宮指図

継続的に行った。

その後、明治政府の神仏分離令により、仏教施設は姿を消したが、上下両宮の構成は現在に継承されている。

また、由比ヶ浜海岸から海を背にして市街地に目を向けると、正面中央の山裾^{やますそ}に造営された鶴岡八幡宮は、幕府が所在していた鎌倉地域の中心に造営されていたことが分かる。寿永元年（1182年）に、源頼朝の妻である北条政子の安産を祈願して造られた若宮大路は、鶴岡八幡宮三ノ鳥居から海岸に向かって、約 1.5 km の長さで真っ直ぐに造られた参道であり、かつ幕府所在地の軸線となっていた。こうした鶴岡八幡宮及び若宮大路の「まちの中心と軸線」という位置付けは、中世以来、現在に至るまでまちづくり上の基本的構造として引き継がれている。

なお、鶴岡八幡宮境内は裏山の鶴岡二十五坊跡^{にじゅうごぼうあと}を含めて昭和 42 年（1967 年）に、若宮大路は昭和 10 年（1935 年）に史跡に指定されており、境内に建つ上宮、摂社若宮、末社丸山稻荷社本殿及び若宮大路南端付近に建つ石造の一ノ鳥居は重要文化財に指定されている。

鶴岡八幡宮は、鎌倉幕府の守護神として、最も重要な施設に位置付けられた神社である。頼朝の時代から続く、例大祭や流鏑馬神事^{やぶさめしんじ}をはじめ、1 年を通じて様々な伝統行事が現在も行われている。

（i）上宮

上宮は、大石段の階段の上に位置する。建久 2 年（1191 年）3 月に起きた大火に類焼し、鶴岡八幡宮の当時の社殿・廻廊などは、ほとんどが焼失した。このため、源頼朝は、大臣山の地を拓いて新たな社殿を造営し、同年 11 月に遷宮を行った。これにより、現在のよう上下両宮の構成となった。その後、何度も火災等の被害を被ったが、歴代武家政権により、そのたびに再建された。文政 4 年（1821 年）の大火災で上宮本殿を焼失したが、文政 11 年（1828 年）に第十一代将軍徳川家斉によって再建され、九間社流造による権現造となった。現在の社殿はその時のものである。

社殿は、幣殿^{へいでん}と拝殿^{はいでん}を連ねた流権現造^{ながれごんげんづくり}で、廻廊が左右に伸びて、本殿を囲む形になっており、建物内外の上部壁面には、鳥獣草木が描かれ、精巧な彫刻とともに細部にわたり見事な色彩が施されている。重要文化財に指定されている。



写真2-2 鶴岡八幡宮 上宮

(ii) 摂社若宮

若宮の創始は古く、源頼朝が治承4年（1180年）に由比郷にあった鶴岡宮を現在地に遷宮し、「鶴岡八幡新宮若宮」と称されていた時代にまで遡る。建久2年（1191年）3月におきた大火により社殿が焼失してしまうが、源頼朝が大臣山中腹をけずり、そこに上宮を建て、従来の社殿があった位置に下宮を建て若宮とした。これにより、現在のような上下両宮の姿となった。これ以来、若宮を下宮と称するようになった。その後、幾度かの修理・再建を経て、寛永元年（1624年）に上下両宮造替が行われた。現在の社殿はその時のものである。その後もさらに寛文から昭和にかけて修理が行われた。



写真2-3 鶴岡八幡宮 摂社若宮

社殿は、桁行が五間、梁行が二間の^{もや}身舎全面に^{こうはい}向拝をつけた流造の形式である。廻廊、末社武内社とあわせて、重要文化財に指定されている。

(iii) 末社丸山稻荷社本殿

丸山稻荷社は、上宮廻廊の西方、小高い丘の上にある。建長5年（1253年）に創建、応永5年（1398年）に造替の蛭子三郎明神社が江戸時代に^{りゅうえいしや}柳宮社となり、さらに明治時代に入って丸山稻荷社本殿として現在の場所に移築されたものである。鶴岡八幡宮において最古の建造物であると推定される。



写真2-4 丸山稻荷社

本殿の形式は、一間社流見世棚造で、桁行一間、梁間一間切妻身舎に同じ桁行の向拝を張出し、正面と両側面の縁の出は、向拝の出より少し小さい。一部後世の改造も認められるが、様式は、純粋な中世和様本殿であり、貴重な古建築である。重要文化財に指定されている。

(b) 八雲神社(大町)

大町にある八雲神社は、平安時代永保年間（1081～^{みなものよしみつ}1084年）源義光の勧請と伝えられている。後三年合戦に奥州鎮護の任務にあたった兄源義家の苦戦が伝えられる中、義光は力添えのために官職を辞して現地に向かうが、鎌倉に入ると悪疫により苦しむ人々を目の当たりにし、厄除けのために京都の祇園社を勧請し、土地の守



写真2-5 八雲神社(大町)

護神として崇めた。すると悪疫はたちまち退散し、人々は難を逃れたといわれており、八雲神社が鎌倉の「厄除さん」といわれる由縁でもある。

現在の社殿は昭和5年（1930年）に竣工した。社殿は、拝殿と本殿が一体となった造りをしている。拝殿の屋根は、入母屋造で、正面に一間の向拝が設けられている。本殿は、三間社神明造で、屋根は銅板葺である。境内には稲荷社の他に、「寛文十年」（1670年）の銘がある庚申塔こうしんとうが建っている。庚申塔は市指定有形民俗文化財である。

(c) 荏柄天神社えがらてんじんしゃ

荏柄天神社は、鶴岡八幡宮及び旧大倉幕府の北東に位置し、古くは荏柄山天満宮じんぺいざんてんまんぐうとも号された。源頼朝は、長治元年（1104年）創建の天神社を幕府鬼門の守護神と位置付け、改めて社殿を造営した。以後、武家の誓約を司る神として、鶴岡八幡宮とともに江戸幕府に至るまで、関東の戦国大名や武家政権の庇護をうけた。



写真2-6 荏柄天神社社殿

現存する本殿は、寛永元年（1624年）の鶴岡八幡宮若宮の社殿造営に伴い、若宮の旧本殿を移築して再興されたものである。若宮自体は、正和5年（1316年）再建後、中世を通じて維持されているため、この本殿創建は14世紀に遡る可能性がある。形式は三間社流造、屋根は銅板葺である。内部は小組格天井とし、内法長押上の小壁に横連子を入れる。鶴岡八幡宮の室町時代に遡る主要社殿を伝える唯一の例として大変重要な建造物であり、重要文化財として指定を受け、また、境内も史跡の指定を受けている。

境内には、昭和46年（1971年）に奥多摩の天然石で造られた「かっぱ筆塚」と平成元年（1989年）に青銅製の筆の形を模した「絵筆塚」と呼ばれる2つの筆塚がある。「かっぱ筆塚」は、漫画家の清水崑こんが愛用した絵筆を埋納した際に建てられた。「絵筆塚」は、清水崑の死後、漫画家の横山隆一が中心となり建てられた。「絵筆塚」には多くの漫画家が描いたかっぱのレリーフが飾られている。それぞれ、除幕式当日の写真が荏柄天神社に保管されている。

(d) 銭洗弁財天宇賀福神社

銭洗弁財天宇賀福神社は、JR 鎌倉駅から源氏山公園へと向かう急な坂道の途中に位置する。

道の切岸に口を開く岩のトンネルを進み、さらにその先の木の鳥居を抜けると広々とした空間が開け、右手には本殿と弁財天を祀る洞窟が見える。洞窟入口には、唐破風屋根付きの本社がある。昭和 38 年（1964 年）の写真から、昔から現在と同様に、洞窟奥には小さな木造の奥宮が岩壁に寄り添うようにあることが分かる。境内には、七福神を祀った末社や上の水神社・下の水神社が崖の中腹まで建ち並び、巡回して参拝できるようになっている。また、参拝者のための茶店もあり、巳の日など是大いに賑わう。



写真2-7 銭洗弁財天宇賀福神社
(昭和 38 年(1964 年))



写真2-8 銭洗弁財天宇賀福神社

銭洗弁財天には、巳の月の巳の日の夜中に宇賀福神が源頼朝の夢に現れ、その教えに従いこの地に宇賀福神を祀ったところ、平安な世が訪れたとの言い伝えがある。その後、正嘉元年（1257 年）に北条時頼が、ここから湧き出る水で銭を洗い清めれば福銭となる、と自ら銭を洗い祈願したことがはじまりとなったといわれており、今でも多くの人々が年間を通じてこの地を訪れ、幸福利益を願いながら故事に倣って銭洗いを行っている。

(e) 佐助稲荷神社

佐助稲荷神社は、建久年間（1190～1199 年）に源頼朝が畠山重忠に命じて「かくれ里の^{ほくら}祠」を探し当て、稲荷神社を再建させたと伝えられている。源頼朝はかつて^{すけ}佐殿と呼ばれており、佐殿を助けた稲荷社ということで佐助稲荷社と呼ばれている。源頼朝が征夷大將軍まで出世したことから、別名「出世稲荷」と呼ばれ信仰を集めている。



写真2-9 佐助稲荷神社 拝殿

社殿は、拝殿の後方の階段を上った場所に本殿がある形式で、本殿は明治 28 年（1895 年）に建造¹⁷されたものがあつたが、令和元年東日本台風で被害にあい、現在、本殿は、仮殿となっており、拝殿は、令和 2 年（2020 年）に建替えられた。

¹⁷ 昭和 47 年（1972 年）に鎌倉市史編纂委員会が作成した『鎌倉市史 社寺編』（第三版）による。

境内の中には、小さな洞穴の中に^{れいこ}霊狐の神水と称される湧き水があり、洞穴の奥には小さな石造りの祠がある。昭和 45 年（1970 年）の写真を見ても、昔から湧水が絶えることなく湧き出ていることがわかる。



写真2-10 佐助稻荷神社 祠
(昭和 45 年(1970 年))



写真2-11 佐助稻荷神社 祠

(f) 由比若宮（元八幡）

源頼義が前九年の役を平定した後の康平 6 年（1063 年）に、源氏の守り神である石清水八幡宮を由比郷^{かんじょう}に勧請したということが、『吾妻鏡¹⁸』に記されている。その後、源頼朝が現在の鶴岡八幡宮がある場所に遷宮を行ったことから、ここは「元八幡」と呼ばれるようになったといわれる。

由比若宮の社殿は、一間社流造で、朱塗りの外観をしている。境内は、鶴岡八幡宮とともに、史跡に指定されている。昭和 40 年（1965 年）の写真からも、現在と変わらない社殿の様子が分かる。



写真2-12 由比若宮
(昭和 40 年(1965 年))



写真2-13 由比若宮

¹⁸ 鎌倉時代後期に成立したとみられる。

(g) 葛原岡神社・日野俊基墓

葛原岡神社は、日野俊基を祀る神社で、明治天皇が日野俊基に従三位を贈り、地元有志と全国の崇敬者の協力、また、宮内省からの支援により明治 20 年（1887 年）に創建された。日野俊基は後醍醐天皇の側近であり、後醍醐天皇の鎌倉幕府倒幕計画に加担したため仮粧坂¹⁹上の葛原岡で、辞世の句を残し、この地で非業の死を遂げた。

現在の社殿は、平成 20 年（2008 年）の鎮座 120 年を機に氏子・崇拝者からの寄進により、平成 18 年（2006 年）12 月 20 日に遷宮を執り行った。新しい社殿は、拝殿と本殿が一体となった造りになっている。境内は、史跡仮粧坂の一部として史跡に指定されている。神社の南にある日野俊基墓も史跡に指定されている。



写真2-14 葛原岡神社



写真2-15 日野俊基墓

(h) 熊野新宮

極楽寺二丁目に鎮座する熊野新宮に関しては、『忍性菩薩行状略頌』に文永 6 年（1269 年）創建とあり、また永仁 6 年（1298 年）の社殿焼失後、正安 2 年（1300 年）に熊野大神を勧請し、熊野新宮としたと伝わっている。関東大震災で村内の八雲神社と諏訪神社が倒壊すると、この 2 社を昭和 3 年（1928 年）に合祀^{ごうし}し、現在の姿となった。棟札によると、現在の社殿は昭和 2 年（1927 年）の造営である。拝殿、幣殿、本殿が一直線に配置されている。本殿は一間社流造で、屋根は銅板葺となっている。



写真2-16 熊野新宮

¹⁹ 史跡の指定名称は「仮粧坂」であり、ふりがなは「けはいざか」であるものの、「化粧坂」と表記する場合や、「けわいざか」と読む場合もある。

(i) 八雲神社(山ノ内)

山ノ内の八雲神社は、文明年間（1469～1487年）に創建されたと伝わり、市の指定有形文化財で、鎌倉市で最古かつ最大とされる寛文5年（1665年）銘の庚申塔や、安倍晴明の伝説が残る晴明石などが境内に残っている。

現在の社殿は弘化3年（1846年）の再建²⁰で、拝殿、幣殿、本殿が一直線に配置されている。本殿は一間社流造で、屋根は銅板葺である。



写真2-17 八雲神社(山ノ内)

(j) 八雲神社(常盤)

常盤の八雲神社は、治承年間（1177～1181年）に創建されたと伝わる。「文久二年」（1862年）の銘がある石造りの鳥居の奥にある階段を上ると社殿がある。以前は天王社と呼ばれ、御嶽神社・諏訪神社が合祀され、現在の地に社殿が建築された。

社殿は、拝殿、幣殿、本殿が一直線に配置されている。本殿は一間社流造で、屋根は銅板葺である。昭和48年（1973年）の写真からも、現在と変わらない社殿の様子が分かる。



写真2-18 八雲神社(常盤)

(昭和48年(1973年))



写真2-19 八雲神社(常盤)

(k) 鎌倉宮

鎌倉宮は、明治2年（1869年）に明治政府が勅命により創建した神社であり、鶴岡八幡宮から東へ約1kmの場所に位置している。緑に囲まれた境内の入口には、石造りの鳥居がそびえ立ち、その下をくぐり抜けると広々とした空間に石畳の参道が延びている。正面に見える石段を上がり、2つ目の鳥居を抜けた先には、拝殿、本殿が立ち並んでいる。

祭神は、後醍醐天皇の皇子で鎌倉幕府の倒幕に貢献した大塔宮護良親王であることから、鎌倉宮は大塔宮とも呼ばれている。初詣に訪れた参拝客の多くが求める獅子頭は、護良親王が戦いに臨む際、兜の中に厄を食べ、幸せを招くといわれる獅子頭のお守りを忍ばせたとの言い伝えによるものである。

²⁰ 昭和47年（1972年）に鎌倉市史編纂委員会が作成した『鎌倉市史 社寺編』（第三版）による。

本殿をはじめとする境内の建築物は明治2年（1869年）創建²¹当初のものである。拝殿は、妻入りの入母屋銅板葺、拝殿と本殿を繋ぐ位置に幣殿代わりとなる中門があり、本殿は、三間社神明造で、屋根は反りのある切妻銅板葺という造りになっている。



写真2-20 鎌倉宮
(昭和50年(1975年))



写真2-21 鎌倉宮

(I) あまなわしんめいぐう 甘縄神明宮

甘縄神明宮は、正徳2年（1712年）成立の『相州鎌倉郡神輿山甘縄寺神明宮縁起略』によると、和銅年間（708～715年）にこの辺りの豪族、染谷太郎時忠が創建した鎌倉で最古といわれる神社である。

関東大震災により、本殿は半壊し、拝殿は全壊したが、昭和12年（1937年）に新築²²された。拝殿の後方に石段があり、本殿と繋がっている。拝殿、本殿共に屋根上に千木、堅魚木があり、本殿は、一間神明造で、屋根は切妻銅板葺である。石造りの神明鳥居の脇には、鎌倉青年団が大正14年（1925年）に建立した「足達盛長邸址」の石碑が残る。



写真2-22 甘縄神明宮

源頼義が相模守としてこの神社にお参りした後、義家が誕生し、その後義家が社^{やしろ}を再建したと伝わっている。『吾妻鏡』によれば、鎌倉時代には、源頼朝、政子、実朝らが参詣しており、源氏と縁が深い。川端康成の『山の音』に登場する信吾の家の裏山の神社のモデルともいわれる。

²¹ 昭和47年（1972年）に鎌倉市史編纂委員会が作成した『鎌倉市史 社寺編』（第三版）による。

²² 昭和47年（1972年）に鎌倉市史編纂委員会が作成した『鎌倉市史 社寺編』（第三版）による。

b 寺院

(a) 建長寺

建長寺は、建長5年（1253年）に鎌倉幕府第五代執権北条時頼が、中国（南宋）の禅僧蘭溪道隆を開山に迎えて創建した我が国初の禅宗専門道場であり、我が国に禅宗が定着する契機をなした最も重要な禅宗寺院といえる。現在は臨済宗建長寺派の大本山で巨福山建長興国禅寺と号する。仏殿前庭及び方丈庭園は昭和7年（1932年）に史跡及び名勝の指定を受けており、6件の重要文化財（山門・仏殿・法堂・唐門・昭堂・大覚禅師塔）のほか、国宝に指定された建長7年（1255年）鑄造の梵鐘など多くの文化財を有している。

昭和41年（1966年）に史跡に指定された境内はかつて「地獄谷」と呼ばれた南に開く谷戸の内部にあり、谷開口部付近の総門から約100mの地点に壮大な山門を構え、そこから谷の中軸線に沿って仏殿前庭、仏殿、法堂、唐門、方丈、方丈庭園等が一直線に配置されている。狭い谷間を造成した中に営まれた直線的な伽藍配置は、我が国における初期大禅宗寺院伽藍の典型であると同時に、後背山稜部と一体となって静寂な宗教空間を形成しており、鎌倉固有の社寺景観を現している。主要伽藍の東西、さらに北東へ谷が入り込む区域には多くの塔頭が営みが続けており、その中でも仏殿前庭から南東に入る小谷に位置し、開山を祀る西来庵の昭堂と大覚禅師塔は特に重要な存在である。また、北東の尾根線付近には、約50穴から成る朱垂木やぐら群が存在する。

このような境内及び伽藍の配置は、「建長寺伽藍指図」（元弘元年（1331年）作成）や「建長寺境内絵図」（延宝6年（1678年）作成）などに描かれた中国禅宗寺院を模した配置を基本的に踏襲している

が、鎌倉時代から室町時代にかけての建長寺は、中国南宋五山に倣った、壮大な伽藍を構えた大禅宗寺院として威容を誇った。創建後の建長寺は、度重なる火災や暴風によって伽

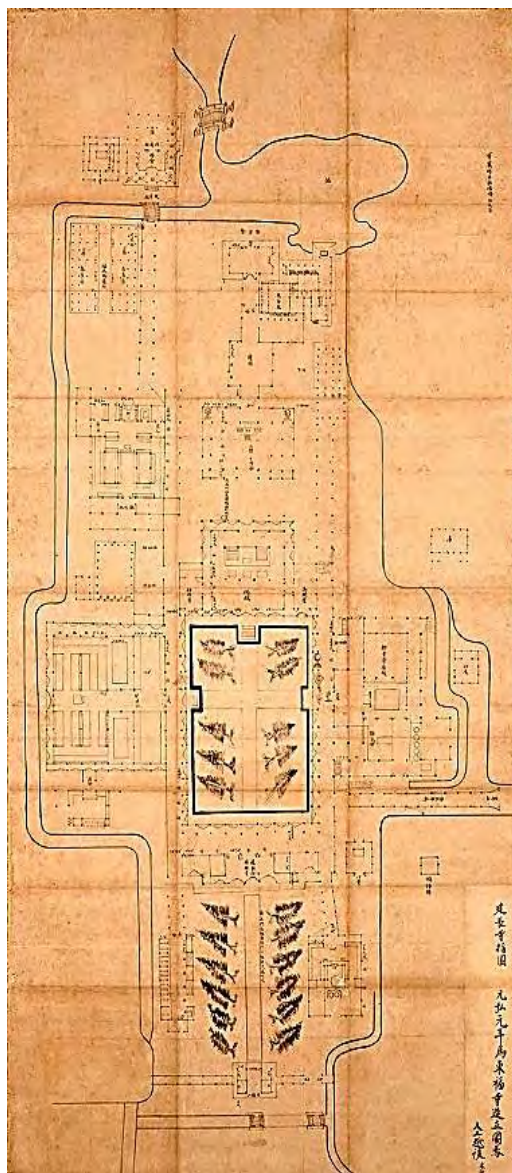


図2-5 建長寺伽藍指図



写真2-23 建長寺 梵鐘

藍の焼失、倒壊といった被害を受けており、その都度、鎌倉幕府や後続した武家政権によって復興が図られた。鎌倉時代に再建するにあたり、「建長寺船」という鎌倉幕府公認の渡航船を元へ派遣し、資金調達を行うとともに、文化的な交流に繋がった。近世以降、江戸幕府は手厚い保護を実施し、正保4年（1647年）には芝増上寺からの唐門や仏殿の移築、延宝6年（1678年）には徳川光圀による『建長寺境内絵図』の寄進の他、数次に及ぶ修造を援助した。現在の主要伽藍は、この江戸幕府を中心とする修造による。

（i）山門

建長寺の山門は、安永4年（1775年）の建設になる。禅宗様を基調とした2階建ての三間二重門で、下層を吹き放し、上層内部には仏壇を備え、屋根は入母屋造銅板葺で、2階正面中央には、軒唐破風を設ける。三間二重門として東日本最大規模を誇る重要な建築である。重要文化財に指定されている。



写真2-24 建長寺 山門

（ii）仏殿

建長寺の仏殿の創建は、建長3年（1251年）だが、その後、数回の火災による消失と再建を繰り返す。現在の建物は、正保4年（1647年）に第二代将軍徳川秀忠の正室である崇源院の御霊屋旧殿を移築したものである。

建長寺仏殿は、方三間の母屋に裳階^{もこし}をめぐらせた裳階付仏殿で、寄棟造瓦棒銅板屋根という造りになっている。重要文化財に指定されている。



写真2-25 建長寺 仏殿

(iii) 法堂^{はつどう}

建長寺の法堂は、文化5年（1808年）に再建が着手され、文政8年（1825年）に竣工した方三間^{もこし}裳階付の大型禅宗様仏堂である。屋根は入母屋造銅板葺で、要所に江戸時代後期らしい装飾性も認められる。重要文化財に指定されている。



写真2-26 建長寺 法堂

(iv) 半僧坊^{はんそうぼう}

半僧坊は、建長寺境内の最奥部、裏山の中腹に位置する鎮守社であり、建長寺の伽藍構成を補完する重要な建造物群である。山門から法堂・方丈などの主要伽藍を経てさらに背後の石段を上った地点に鎮座している。



写真2-27 建長寺 半僧坊

半僧坊権現は、明治23年（1890年）、静岡県奥山方廣寺より勧請されたもので、鎌倉建長寺の鎮守として祀られた。昭和45年（1970年）に建長寺で発行された会報誌「和光」にも、その旨が記載されている。

本殿（社殿）は木造入母屋造、銅板葺で、正面に向拝を備える。建長寺の主要伽藍とは異なる和風社殿の姿を持ちながらも、周囲の山林や石段参道との調和した構えを示す。社殿へ至る長大な石段参道の両側には天狗像が多数配置され、これらの造形群が社殿への導入空間を演出している。

(b) 円覚寺

円覚寺は、弘安5年（1282年）に鎌倉幕府第八代執権北条時宗が、モンゴル襲来時の犠牲者を敵味方の区別なく弔うため、中国の禅僧無学祖元^{むがくそげん}を開山に迎えて創建した禅宗専門道場である。建長寺と並んで我が国に禅宗が定着する契機をなした重要な禅宗寺院であるとともに、鎌倉幕府による神道と禅宗を両輪とする宗教政策の中心



写真2-28 円覚寺 山門

であり、建長寺に並ぶ当時の中国文化受容の最大の拠点として、武家文化の成立と発展に大きく貢献した。現在は臨済宗円覚寺派の大本山で瑞鹿山円覚興聖^{ずいろくさんえんがくこうしょうぜん じ}禅寺と号する。

円覚寺境内は昭和 42 年（1967 年）に史跡に指定され、仏殿の前庭、白鷺池及び妙香池は昭和 7 年（1932 年）に史跡及び名勝の指定を受けている。

境内は、南西に開く谷戸が^{ひなだんじょう}雛壇状に造成されており、北東方向へ約 500m 入り込む谷戸の入り口横に白鷺池、そこから一段高くなった位置に総門を構える。総門



写真2-29 円覚寺 妙香池

を入ると約 300m の間に諸伽藍が一直線に配置されている。建長寺同様、狭い谷間を造成した中に営まれた伽藍は、我が国における初期大禅宗寺院伽藍の典型であると同時に、後背山稜部と一体となって静寂な宗教空間を形成しており、鎌倉固有の社寺景観を現出している。また、山門の北東約 270m の位置、東西側及び北側に迫る山稜部の裾を切り下げた空間には 15 世紀前半の建築と推定される国宝の舍利殿、山門の南東側

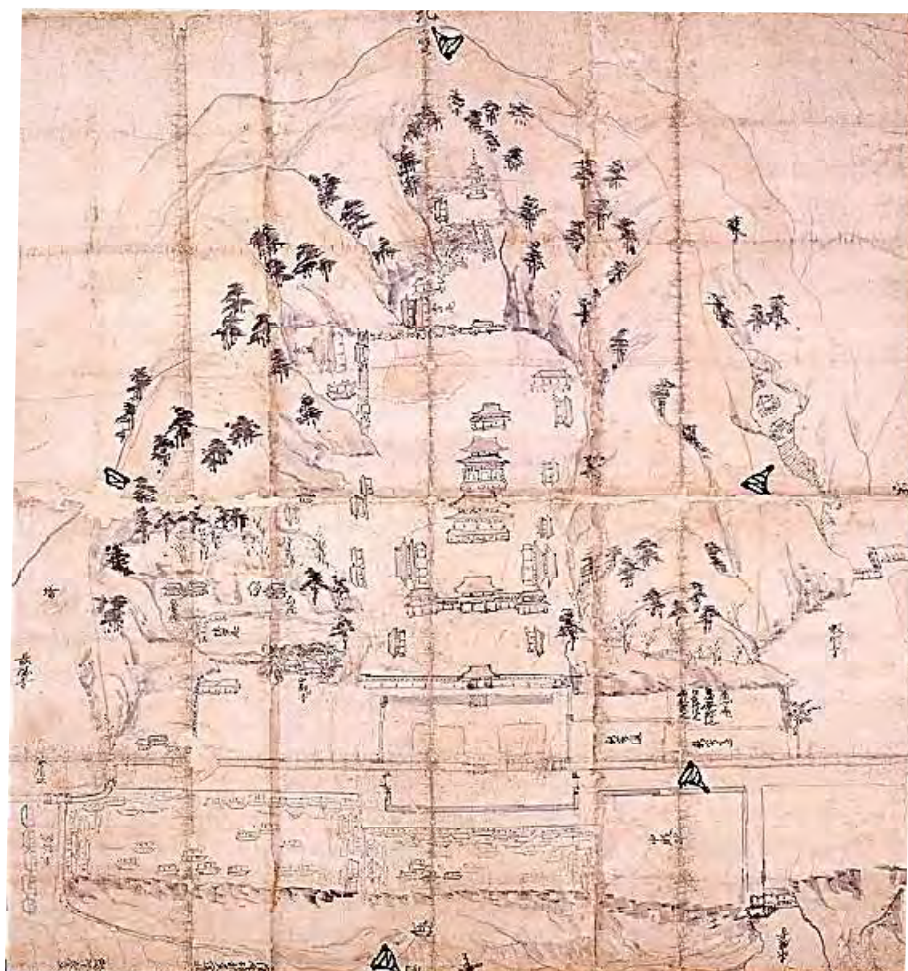


図2-6 円覚寺境内絵図

約 100m の丘陵上には正安 3 年（1301 年）鑄造の国宝の梵鐘が所在する。

円覚寺は、鎌倉幕府の庇護の下に境内整備が進められ、鎌倉幕府滅亡後も室町幕府等の時の権力者の保護を受け、14 世紀前半には、大伽藍を備えた最盛期を迎えた。当時の状況を描く正慶 2 年（1333 年）～建武 2 年（1335 年）頃作製の「円覚寺境内絵図」によれば、主要伽藍が中軸線上に並び、建長寺と同様に中国禅宗寺院を模して造営されたことが明らかである。江戸時代には江戸幕府の保護による伽藍の復興が進められ、18 世紀後半には現在の姿に整備された。

(i) 舍利殿

円覚寺の舍利殿は、永禄6年（1563年）の大火後の復興事業として、後北条氏の助力により、西御門にあった太平寺の仏殿を天正年間（1573～1592年）に移築したものと考えられている。

太平寺におけるこの建物の建立年代は明らかではないが、15世紀前半に建立された正福寺地藏堂（東京都東村山市）と酷似することから、室町時代中頃に建立されたものと推測される。禅宗とともに伝来した宋の建築様式、禅宗様の仏堂で、現存する禅宗様建築の典型とされる。国宝に指定されている。



写真2-30 円覚寺 舍利殿

(c) 浄智寺

浄智寺は鎌倉幕府第五代執権北条時頼の子である宗政の菩提を弔うために、弘安4年（1281年）に創建されており、金寶山浄智寺と号する。^{きんほうざん}緑豊かな境内は史跡に指定されている。鐘楼門は鐘つき堂を兼ねた山門で、全国でも珍しく、延宝7年（1679年）銘の梵鐘がかかっている。



写真2-31 浄智寺

その他に、古くから残る建造物として葵門と外門がある。どちらも江戸時代後期の建築²³とされている。葵門は、書院と庫裡に行く門であり、一間棟門で屋根は鉄板葺となっており、扉の上方に墨で丸く葵の紋を描いている。外門は、浄智寺参道の石段を上がったところにある高麗門で、屋根は切妻造^{さんかわら}棧瓦葺である。

^{どんげでん}曇華殿と称される本堂は、関東大震災で倒壊してしまい、その後多くの人々から寄付を受けて昭和7年（1932年）に再建²⁴された。建物は宝形造で、屋根は棧瓦葺の形式である。浄智寺が創建された当時は、中国（宋）からの渡来僧も多かったことから、宋の建築様式をうかがうことができる造りをしている。

そのほかに大正13年（1924年）に建築された茅葺屋根が特徴的な書院があり、正面からも庭園からも美しいたたずまいを見ることができる。

元亨3年（1323年）の北条貞時の十三回忌の際に参加した浄智寺の僧侶は224人で、建長寺・円覚寺・寿福寺に次ぐ人数であり、寺権を誇っていた。

総門の手前には石橋のかかった池があり、その近くには鎌倉十井の一つである甘露ノ井がある。

²³ 昭和62年（1987年）に鎌倉市文化財総合目録編さん委員会と鎌倉市教育委員会が作成した『鎌倉市文化財総合目録 建造物篇』による。

²⁴ 令和4年（2022年）に浄智寺が発行した『史跡浄智寺境内保存活用計画』による。

(d) 高德院

高德院は、鎌倉大仏として知られる浄土宗の寺院で、正式には大異山高德院 清浄泉寺と号する。国宝に指定されている青銅製の阿弥陀如来坐像は、高さ約 11.3m、重さ約 121t に及び、奈良の大仏と並ぶ巨像として全国的に広く知られている。『吾妻鏡』によれば、暦仁元年（1238 年）に木造の大仏の造立が始まった。その後、建長 4 年（1252 年）に青銅の大仏が造られ始めたと伝わる。



写真2-32 鎌倉大仏

当初は大仏殿に安置されていたが、度重なる災害によって建物は失われ、現在では露坐の姿が鎌倉の風景に溶け込んでいる。境内には、かつて大仏を覆っていた大仏殿の存在をしのばせる礎石も残されている。境内は、鎌倉大仏殿跡として史跡に指定されている。

(e) 本覚寺

本覚寺の境内は、『吾妻鏡』にみられる夷堂の地といわれている。当初は天台宗の寺院であったが、日蓮がここに留まったことから改宗し、日蓮宗の寺院になったと伝わっている。妙厳山本覚寺と号する。

本堂は大正 12 年（1923 年）に建て直したものであり、境内中央西寄りに東面し、正面 7 間の入母屋造棧瓦葺で、正面に軒唐破風の向拝を付す。日蓮宗において伝統的な平面ながら、建登せ柱が使用され、小屋組はトラス構造を採用し、軽量化が図られている。客殿・庫裡・分骨堂・鐘楼・手水舎・楼門・大門とともに登録有形文化財である。



写真2-33 本覚寺 本堂

(f) 虚空蔵堂

虚空蔵堂は、極楽寺坂の入口に位置する成就院の境外仏堂である。弘法大師ゆかりと伝わる地に建立された成就院の歴代住職が、100 日間かけて真言を 100 万回唱える虚空蔵菩薩求聞持法と呼ばれる修行法で修行した仏堂である。虚空蔵菩薩は福德と知恵を人々に与え、すべての願い事を満たしてくれる仏様として信仰を集めている。^{みょうきょうざんえんまんいんほしの}明鏡山円満院星井寺と号する。

仏堂は、寄棟造瓦葺の屋根をした小堂である。正面に唐破風を備えた向拝を設けている。元々の仏堂は、現在の場所よりもさらに山の上にあったとされるが、関東大震災で倒壊してしまった。現在の仏堂は、地域の人々からの寄進等により昭和 10 年（1935 年）に新たに建てられたものであることが、成就院に保管されている昭和 9 年（1934 年）に作成された「堂宇改築許可願」や当時の写真などから分かる。



写真2-34 虚空蔵堂
(昭和 10 年(1934 年))



写真2-35 虚空蔵堂

(g) 円応寺

円応寺は、建長 2 年（1250 年）に彫像された閻魔大王を本尊としている。新居山円応寺と号する。室町時代後期から戦国時代にかけて成立したとみられる『文明明応年間関東禅林詩文等抄録』によると、円応寺は当初、高德院（鎌倉大仏）の近くにあり、鎌倉幕府滅亡後に足利尊氏が材木座に移築していることが分かる。享保 2 年（1717 年）に鎌倉を訪れた太宰 春 台が江戸時代中期に著した『湘中紀行』では、すでに現在の地に移っている。本尊の閻魔王座像は重要文化財で、寺伝によれば、運慶の作品と伝わる。



写真2-36 円応寺

^{だざいしゅんたい}

現在の本堂は、関東大震災で倒壊後、昭和14年（1939年）に古材を用いて再建²⁵され、桁行五間、梁間五間の規模で、宝形造棧瓦葺の屋根をもつ。後面中央一間に本尊閻魔王像安置のための張出がある。

境内は、史跡建長寺境内の一部として、史跡に指定されている。

(h) 宝戒寺

宝戒寺は、鎌倉幕府滅亡による北条一族の霊を弔うため、建武2年（1335年）に後醍醐天皇が足利尊氏に命じ、北条家執権の屋敷跡に創建された。きんりゅうざんしゃくまんいんえんどん金龍山釈満院円頓宝戒寺と号する。本尊は子育経読地蔵として信仰される重要文化財の地蔵菩薩坐像である。本堂に向かって右には聖徳太子を祀った太子堂がある。秋の彼岸頃に咲く参道沿いの白萩が有名であり、「萩寺」という名でも親しまれている。



写真2-37 宝戒寺

現在の本堂は昭和6年（1931年）の建立²⁶である。桁行五間の規模で、屋根は入母屋造瓦葺の禅宗様式を基調とした建築である。

(i) 明王院

明王院は嘉禎元年（1235年）に鎌倉幕府第四代将軍藤原頼経により創建された。はんじょうさんかんぎじ飯盛山寛喜寺明王院と号する。不動、降三世、ごうざんぜ大威徳、だいいとく軍荼利、ぐんだり金剛夜叉の五大明王像を祀っているのは、鎌倉では明王院のみであり、不動明王坐像は重要文化財である。弘安4年（1281年）に記された『異国降伏祈祷記』には、鎌倉幕府の祈願所として、モンゴル襲来の際に明王院で元軍退散の法要がなされた記録が残っている。



写真2-38 明王院

現在の本堂は、元禄6年（1693年）の建築²⁷で、桁行三間、梁間三間の規模で、茅葺の寄棟屋根が印象的な建物である。

²⁵ 昭和62年（1987年）に鎌倉市文化財総合目録編さん委員会と鎌倉市教育委員会が作成した『鎌倉市文化財総合目録 建造物篇』による。

²⁶ 昭和47年（1972年）に鎌倉市史編纂委員会が作成した『鎌倉市史 社寺編』（第三版）による。

²⁷ 昭和62年（1987年）に鎌倉市文化財総合目録編さん委員会と鎌倉市教育委員会が作成した『鎌倉市文化財総合目録 建造物篇』による。

(j) 極楽寺

極楽寺は、正元元年（1259 年）に、第二代執権北条義時の三男で、第五代執権北条時頼の補佐を行うなど幕府内で重きをなした北条重時が、日本人律宗僧の忍性を開山に招いて創建した。現在は、真言律宗の寺院で、りょうじゅせんかんのういんごくらくりつじ 霊鷲山感応院極楽律寺と号する。



写真2-39 極楽寺 山門

中世には子院 49 箇院を有する大寺院であったが、現在の境内は、北西から南西の周囲を山陵に囲まれた一画に営まれ、山門から参道を約 50m 進んだ場所に、伽藍が配置されている。また、西側の山稜部の裾には、開山の忍性及び第二代 じゅんにん 順忍の墓塔である大型の五輪塔 2 基が建つ。忍性墓塔は国指定の重要文化財で、順忍墓塔は、市指定有形文化財である。



写真2-40 極楽寺 忍性塔

忍性は、布教活動を行うとともに、極楽寺を拠点に弱者・貧民救済の事業や、道路や橋の建設及び井戸の掘削などの土木事業にも力を注いだ。また、極楽寺は、和賀江嶋の管理・徴税などの権利を幕府から与えられるなど、鎌倉幕府において重要な役割を果たした。

なお、当初の史跡指定は忍性墓の範囲のみであったが、平成 20 年（2008 年）に境内一体が追加指定された。

(k) 光明寺

光明寺は、仁治元年（1240 年）に、第四代執権北条経時 つねとき が浄土宗三祖然阿良忠 ねん なりょうちゅう を開山に開創した蓮華寺 れんげ じ を起源とし、寛元元年（1243 年）に現在地に移築し、光明寺と改称したとされるが定かではない。室町時代には第九代住職観 かん 譽祐崇 よゆうそう によって中興され、明応 4 年（1495 年）には後土御門 ごつちみかど 天皇より 勅願寺 ちよくがん じ に定められており、江戸時代には、浄土宗



写真2-41 光明寺 本堂

の関東十八檀林の第一位の寺として栄えた。現在は、浄土宗大本山天照山光明寺と号する。

東に山稜部が迫る境内には、山門、本堂、ひゅう が のべおか 日向延岡藩主内藤家歴代の墓所などがある。本堂は重要文化財に指定されており、元禄 11 年（1698 年）に建てられた、現存する鎌倉近世仏堂のうち最大の堂である。桁行九間、梁間十一間の規模で、瓦棒銅板葺入母屋造の大屋根をもち、正面には、中央軒唐破風付の三間向拝を設ける。内部は上段式になる内陣と後陣、二重構成になる広大な外陣など、浄土宗寺院における大規模な本堂として特色ある構成をしている。

なお、令和 8 年（2026 年）現在、浄土宗開宗 850 年記念事業として本堂の大改修を実施中のため公開されていない。



写真2-42 光明寺
(昭和36年(1961年))



写真2-43 光明寺

(I) 覚園寺

覚園寺は、建保6年(1218年)に第二代執権北条義時が建てた薬師堂を、永仁4年(1296年)に第九代執権北条貞時が元の討滅を祈願して寺院に整備したもので、諸宗兼学の寺院として繁栄した。鷲峰山真言院覚園寺と号する。

創建当初は、多くの伽藍を備えた大規模かつ荘厳な寺観を呈していたが、現在の境内は、谷の最奥に奥行約380m、最大幅約50m程の範囲に営まれている。境内には、薬師堂の他各種の建物が建ち、境内最奥部には大型宝篋印塔の開山塔及び大燈塔(正慶元年(1332年)建立の重要文化財)他、歴代住持の墓塔が並び建ち、寺院の聖域を形成している。



写真2-44 覚園寺 薬師堂

境内全体が山稜部の裾を切り落として谷を広げた状況をよくとどめ、境内奥から後背の山稜頂部(標高約150m)までが連続する地形は、鎌倉の寺院の中でも、最も幽玄かつ静寂な宗教空間の特徴を保持している。また、百八やぐら群が存在する背後の山稜部も含め、覚園寺は昭和42年(1967年)に境内全域が史跡に指定されている。

現在の薬師堂は、文和3年(1354年)に建立され、元禄2年(1689年)に改築²⁸された。鎌倉石で積んだ基壇の上に建ち、方五間の規模で、屋根は寄棟造の茅葺である。内部は、禅宗様方三間裳階付仏殿と同じ構成であり、長大な禅宗様仏壇に薬師如来像と日光・月光両菩薩像(いずれも国指定の重要文化財)が安置されている。これは、全国的にみても大規模な宋風仏殿内部の偉容をうかがわせる唯一の例である。薬師堂は、県指定重要文化財である。

²⁸ 昭和62年(1987年)に鎌倉市文化財総合目録編さん委員会と鎌倉市教育委員会が作成した『鎌倉市文化財総合目録 建造物篇』による。

(m) 長谷寺

長谷寺は天平8年（736年）に聖武天皇の治世下に勅願所と定められたと伝えられる。実際の創建年次は不詳であるものの、梵鐘に文永元年（1264年）の銘があることから、13世紀には創建されていたと考えられる。^{かいこうざん じしやういん}海光山慈照院長谷寺と号する。本尊の十一面観音菩薩立像は木彫の仏像として日本最大級の高さ9.18mを有する。

観音堂は大正12年（1923年）の関東大震災で大きく崩れたため、本尊を祀る内陣が昭和18年（1943年）に再建された。現在の観音堂は昭和60年（1985年）に再建されたものの、内陣部分は昭和18年（1943年）当時の建築を使用している。観音堂の南方に位置する経蔵内の輪蔵は、東京都八王子市の浄土宗大善寺から移したもので、幕末の様式を示し、江戸時代末期の建築²⁹とみられている。輪蔵の内部は、回転式の八角経庫で、現在は、扉を開けて公開している。すべて素木としながら、構造細部が充実しており、柱や横材に地紋彫や彫刻木鼻がある。



写真2-45 長谷寺 輪蔵



写真2-46 長谷寺 観音堂

(n) 杉本寺

杉本寺は天平6年（734年）の創建と伝えられる。別名「大蔵観音」・「杉本観音」とも呼ばれている。大蔵山杉本寺と号する。

「十一面杉本観音」と書かれたのぼりが立ち並ぶ石段の途中には、仁王門があり、門をくぐると右手に弁財天が祀られている。石段を上りきると、県の重要文化財に指定されている観音堂が見える。観音堂は、延宝6年（1678年）に建てられたもので、桁行五間、梁間五間の寄棟茅葺屋根である。内・外陣に分かれる中世密教本堂形式のものである。壁には参詣者の名前を刷った千社札が貼られている。

観音堂の右手には鐘楼があり、山際には白山権現が祀られ、境内には地藏像や多数の五輪塔が建っている。文治5年（1189年）に観音堂が火事になり、本尊を持ち出すため、別当が観音堂に入った際にやけどを負わなかったと伝わり、観音経の功德が現れる寺として信仰を集めている。源頼朝も深く信仰したと伝わり、建久2年（1191年）の再建においては自ら参詣して本堂の再建に布200反を寄付したと『吾妻鏡』に記載がある。

²⁹ 昭和62年（1987年）に鎌倉市文化財総合目録編さん委員会と鎌倉市教育委員会が作成した『鎌倉市文化財総合目録 建造物篇』による。



写真2-47 杉本寺
(昭和45年(1970年))



写真2-48 杉本寺観音堂

(o) 安養院

安養院は嘉禄元年（1225年）に北条政子や源頼朝の冥福を祈って建てた長楽寺が前身と伝わる。鎌倉時代の終わり頃に火災にあい、鎌倉幕府滅亡後に現在の地へ移転し、北条政子の法名である安養院を院号としたと伝わる。祇園山安養院田代寺と号する。現在の本堂は昭和3年（1928年）の建立³⁰である。本堂は、屋根が入母屋造で、正面に一間の向拝が設けられている。本尊の阿弥陀如来像、千手観音像と北条政子像が安置されている。

本堂右手裏にある高さ約3.4mの宝篋印塔は重要文化財に指定され、徳治3年（1308年）とみられる銘がある。現在、鎌倉の中で年代が推定できる最も古い宝篋印塔である。



写真2-49 安養院 宝篋印塔



写真2-50 安養院

³⁰ 昭和47年（1972年）に鎌倉市史編纂委員会が作成した『鎌倉市史 社寺編』（第三版）による。

(イ)その他の建造物

a 寺院

(a) 寿福寺

寿福寺は日本に臨済宗を伝えた栄西を開山とし、源頼朝が没した翌年の正治2年（1200年）に創建された。『吾妻鏡』の記述から、寿福寺のある場所は源義朝の屋敷があった場所と考えられており、源氏ゆかりの地であったことがわかる。亀谷山寿福金剛禅寺と号する。



写真2-51 寿福寺

源実朝もしばしば訪れ、七堂伽藍や塔頭が14もある大規模な寺院となった。境内は史跡に指定されている。境内のビャクシンも市指定の天然記念物に指定されており、山門の向こうに枝が広がる様子は禅寺の趣を感じさせる。

中軸上に惣門・中門・仏殿、仏殿東北に鐘楼、仏殿北側に客殿・庫裡が建つ。現在の仏殿は、正徳4年（1714年）の建築³¹で、方五間の規模で、屋根は寄棟造棧瓦葺屋根の禅宗様建築である。仏殿は、市指定有形文化財である。

(b) 浄妙寺

浄妙寺は源頼朝の重臣・足利義兼により、退耕行勇を開山として文治4年（1188年）に創建されたと伝わる。退耕行勇は鶴岡八幡宮の供僧であり、北条政子や源実朝にも篤く敬^{あつ}われた高僧である。創建当初の寺号は臨「極楽寺」であったが、建長寺の開山蘭溪道隆の弟子である月峯了然が住職となり、臨済宗の禅刹に改められ、正嘉年間（1257～1259年）頃に現在の浄妙寺に改称した。稻荷山浄妙広利禅寺と号する。



写真2-52 浄妙寺

かつては、外門・総門・山門・仏殿・法堂方丈・禅堂・経堂などの伽藍や多数の塔頭を持つ大寺院だったが、火災などのために徐々に規模が縮小し、現在は総門・本堂・客殿・庫裡が残っている。仏殿の東側には客殿と庫裡があり、仏殿の裏が開山堂で、境内は史跡に指定されている。寺の裏の墓地には、足利貞氏の墓と伝わる「明德三年」（1392年）銘の宝篋印塔の他、室町時代の代々の足利公方の墓と伝わる石塔が多く見られる。

現在の本堂は、宝暦6年（1756年）の建築³²で、規模は、桁行八間、梁間六間で、屋根は寄棟造茅葺形銅板葺の形状をしており、起りと呼ばれる膨らみが特徴的な形をしている。

³¹ 昭和62年（1987年）に鎌倉市文化財総合目録編さん委員会と鎌倉市教育委員会が作成した『鎌倉市文化財総合目録 建造物篇』による。

³² 昭和62年（1987年）に鎌倉市文化財総合目録編さん委員会と鎌倉市教育委員会が作成した『鎌倉市文化財総合目録 建造物篇』による。

鎌倉近世禅宗方丈の唯一の遺構といわれている。寺の名にちなんで現在でも周辺の地名を「浄明寺」といい、地域の人々の生活の中にもその存在が息づいている。

エ 活動

鎌倉における祭礼や伝統行事、その他の活動の全てをここで取り上げることはできないため、その一部について事例を示していく。

〔ア〕鎌倉の社寺における信仰の広がり

中世以降の鎌倉は、狭い範囲に社寺がひしめく、いわば宗教都市であったといえる。現在も鎌倉には多くの社寺があり、それぞれ創建の背景や宗派は様々で、多様な歴史を今に伝えている。

谷戸や街角に点在する社寺は、鎌倉らしい風景を形づくとともに、季節の節目ごとに人々が訪れ、祈りを捧げる場となっている。信仰は日常の営みに自然と溶け込み、今なお市民生活に息づいている。

a 初詣

『吾妻鏡』によれば、治承5年（1181年）1月1日、「卯尅、前武衛、参鶴岳若宮給、不及日次沙汰、以朔旦被定當宮奉幣之日〈云々〉（卯の尅、前武衛、鶴岳若宮に参りたまふ。日次の沙汰に及ばず、朔旦をもって当宮奉幣の日と定められると云々。）」とあり、頼朝が午前6時頃鶴岡八幡宮を訪れ、日柄などのことは関係なく1月1日の朝を鶴岡八幡宮へ奉幣する日と定めたと書かれている。

初詣は、社寺に詣で新たな気持ちで神仏の前で手を合わせ、1年間の無事と幸福を祈る風習であり、地元の氏神様へ参拝することも多いが、近年では有名な社寺へ参拝する人も増え、鶴岡八幡宮には遠方から多くの人々が訪れている。

この参拝者の中には、大晦日の夜から元日の朝にかけて参拝をする人や夜が明けぬうちから訪れる人もいる。境内地の奥深くにぼんやりと浮かび上がる社殿に向かって、人々の列がゆっくりと歩を進める様子が見られる。夜が明けると、境内はさらに多くの参拝客で賑わうようになり、境内入口にそびえる三ノ鳥居から舞殿に続く参道、上宮へ続く大石段には人々が帯のようになって進んで行く光景を見ることができる。また、社殿の周辺では、参拝を終えた人々が破魔矢やお守りを求め、おみくじを引いた人々の弾んだ声があちこち



写真2-53 初詣(鶴岡八幡宮)



写真2-54 初詣
(昭和33年(1958年))

で聞こえる。鶴岡八幡宮では、三が日の参拝客が 200 万人を超える年もある。

元日の未明に鶴岡八幡宮を訪れる参拝者の中には、鶴岡八幡宮へ詣でた後、若宮大路を南へ下り、相模湾を臨む海岸で、山の端から昇る初日の出を待つ人々を見ることができる。こうした光景は、現在初詣が全国的な風習となっている中で、三方は山に囲まれ、一方は海に面した鎌倉の中心に鎮座する、鶴岡八幡宮への初詣が地域の人たちを中心に観光客なども交えた営みとなっていることが分かる。

高德院における初詣では、元日の午前 0 時より拝観が可能である。大仏がライトアップされ、闇の中に浮かび上がる阿弥陀如来坐像が参詣者を迎える。日中とは異なる表情を見せるその光景は、ただ観るだけでなく、祈りの対象としての存在感を印象づけるものとなっている。



写真2-55 初詣(ライトアップ)の様子

また、鶴岡八幡宮、高德院のほかにも、鎌倉宮、銭洗弁財天、建長寺、円覚寺、本覚寺、長谷寺など、鎌倉の社寺には初詣に訪れた多くの人々が門外まで列をなす。特に、鎌倉宮の獅子頭、銭洗弁財天宇賀福神社のお宝たからせん銭が縁起物として知られている。

参拝をした人々が破魔矢や御守等の縁起物を授かり、それらを手に鎌倉市内を巡る光景は、鎌倉の信仰と年中行事が現在も市民生活に根差し、継承されていることを感じることができる。

b 建長寺・円覚寺における托鉢

建長寺、円覚寺ともに境内に修行道場があり、僧侶になろうとする者の神聖な修行の場となっている。一般の人は立ち入りできず、隔絶した空間で毎日厳しい修行が行われる。その修行の一つとして「托鉢」が行われている。

托鉢の起源は鎌倉時代後期といわれ、托鉢は戦中も中断することなく継続されてきた。元々はインドから伝来した修行で、インドでは僧侶が自ら農業など生産活動をすることは認められず、生活を維持するために乞食こっじき（布施）をする必要がある。見返りを求めず、善い行いを施すことで功德を積むことを布施というが、托鉢はこの一つの形態であり、布教活動である。

布施は喜捨の行為であり、布施を受ける者も布施をする者も共に修行となる。鎌倉における托鉢は、駅前などに留まるのではなく、網代笠あじじろがさ、脚絆姿きゃはんで、修行僧 3～5 名で全市域を廻り、一軒一軒の前で読経する。歩きながら読経をしている場合もある。

特に、建長寺においては、日付の下一桁に 1・3・6・8 が付く日は托鉢の日と決まっており、月に 12 日間托鉢に出る。托鉢のルートは全市域を網羅している。建長寺と円覚寺の間で托鉢の経路が重複しないように工夫している。昭和 50 年（1975 年）の写真から、

托鉢が昔から行われていることが分かる。

一軒一軒の前で読経する托鉢の姿は特徴的であり、布施を通じ市民も心の安寧を得ている。山稜に囲まれた鎌倉の狭い市街地を禅僧が丸笠をかぶり、袈裟に鉢を持って列を成して歩く姿は、社寺・背後の緑や山稜・細街路・生垣などが構成する鎌倉らしい景観の中に溶け込み、住民の日常に根付いている。昭和 50 年（1975 年）の写真にも、現在と変わらない、鎌倉のまちを歩く禅僧の姿が写っている。鎌倉のいたるところで網代笠・脚絆姿の修行僧が見られ、読経する声を聞くことができ、住民、来訪者ともに鎌倉らしさや古都としての鎌倉の雰囲気や魅力を感じることができる。



写真2-56 托鉢の様子
(昭和 50 年(1975 年))



写真2-57 托鉢の様子

c 建長寺・円覚寺などにおける参禅

建長寺、円覚寺とも、現在も禅僧の厳しい修行が継続されている他、一般の参禅も盛んに行われている。

特に、円覚寺では、近代以降、在家者（出家せず^{ざいけしや}に仏道に帰依する者）に対する布教活動を盛んに進め、居士禅^{こじぜん}の普及に努めている。また、建長寺では、日時を決めて禅僧による英語での坐禅指導も行っている。

禅について英語で著し、日本の禅文化を海外に広くしらしめた仏教学者の鈴木大拙^{すずき だいせつ}や小説家の夏目漱石など多くの著名人が円覚寺において参禅していることも知られている。昭和 40 年（1965 年）の参禅の案内看板からも、昔から参禅が行われていたことが分かる。

座禅会や講座が開催される際には、早朝や夕方に、参禅する人々が寺に入っていく光景が見られ、一般の人々が鎌倉の禅文化に親しみをもち、日常の中でその教えや心構えを身近に思っていることを感じることができる。



写真2-58 日曜坐禅会の案内看板(円覚寺)
(昭和 40 年(1965 年))



写真2-59 坐禅会(円覚寺)

d 寺院の梵鐘の響き

関東最大級の釣鐘であり、国宝である円覚寺の洪鐘のほか、建長寺、浄智寺、光明寺、長谷寺、本覚寺、杉本寺、明王院など幾つもの寺院に梵鐘がある。戦時中の金属供出などで一時中断した寺院もあるものの、多くの寺院で継続的につかれている。

寺院の梵鐘の音は、地形によって異なるものの、山稜に囲われ、谷戸の多い鎌倉では、概ね半径 500m～1 km 圏内に響き渡る。

梵鐘の音は、修行僧・地域の人へ時刻を知らせる鐘であると同時に、僧侶の1日の修行の始まりを告げる、法要の合図や地域の安寧を祈る目的でつく場合もある。

時刻を知らせる鐘としては、夕方、日没近くの決まった時間に梵鐘をつく寺院が多いが、鎌倉の街中では、鐘の音を聴き、夕方の訪れを察知した子供たちが帰宅の途に就く様子や、音の聞こえる若宮大路沿道の商店の中には鐘の音を合図に店じまいの支度にとりかかる様子も見られる。このように、梵鐘の音は鎌倉の独自性を示すものの一つとなっており、住民の日常生活とも密接な関わりを感じることができる。

また、一年の締めくくりに響く除夜の鐘は、日々の暮らしの延長線上にある特別な鐘として、多くの人々に親しまれている。大晦日の夜には、市内のあちこちの寺院で百八の煩惱を祓^{はら}う鐘の音が鳴り響く。複数の鐘が同時に聞こえてくる様子は、社寺が密集している鎌倉ならではの音風景であり、地元の人々や訪れた人々が静かに耳を傾ける光景を見ることができる。

鎌倉では、このように日常と非日常の双方において、梵鐘の音が人々の暮らしと結びついている。それは単なる時を告げる音ではなく、信仰と生活、歴史と現在とが常に隣り合わせにある、鎌倉ならではの音風景といえる。



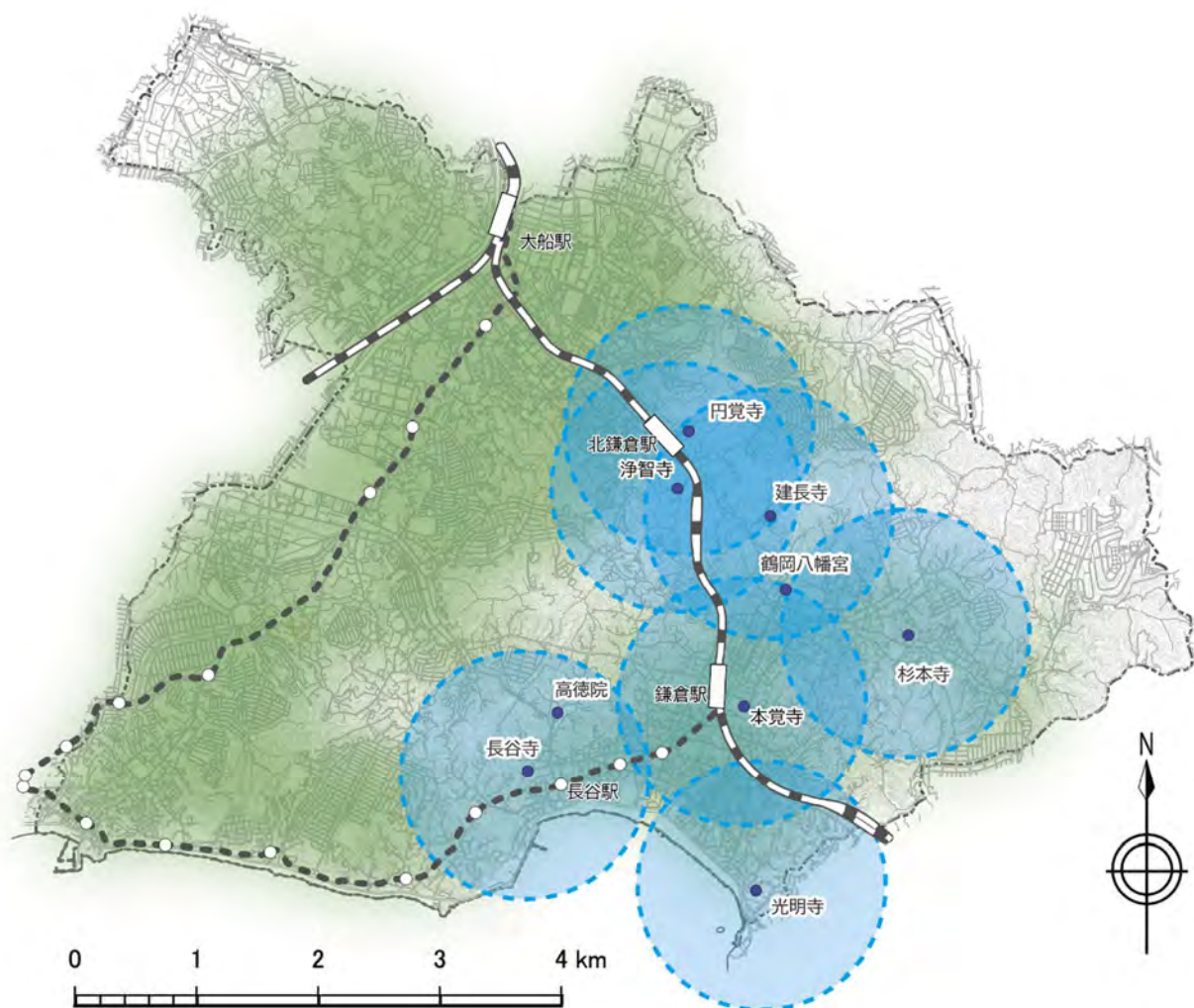
写真2-60 円覚寺 除夜の鐘
(昭和 42 年(1967 年))



写真2-61 円覚寺 除夜の鐘

e まとめ

鎌倉の各地にある多くの社寺は、地域の人々の営みの中にある存在となっている。日常に溶け込む、托鉢で僧侶が列をなす光景、梵鐘の音や初詣などの年中行事は、鎌倉の人々が自然と信仰に触れ、日常の中で大切にしていることが感じられる。



	歴史的風致を形成する建造物
	托鉢僧が見られる範囲
	梵鐘の音が聞こえる範囲 (半径約1kmを想定)

図2-7 信仰にまつわる活動の市街地への広がり

(イ) 神社における祭礼・行事

鎌倉の神社における祭礼・行事について、その一部を示す。

表2-1 神社における祭礼・行事

月日		祭礼名	場所
1月	1日	さいたんさい 歳旦祭	鶴岡八幡宮ほか
	1～7日	ごはんぎようじ 御判行事	鶴岡八幡宮
	4日	ちようなはじめしき 手斧始式	鶴岡八幡宮
	5日	じよましんじ 除魔神事	鶴岡八幡宮
	6日	はつかぐら 初神楽	八雲神社（大町）
	25日	はつてんじん ふでくよう 初天神・筆供養	荏柄天神社
	巳の日	はつみさい 初巳祭	銭洗弁財天宇賀福神社
2月	午の日	はつうまい 初午祭	佐助稻荷神社・丸山稻荷社
	17日	きねんさい 祈年祭	鶴岡八幡宮ほか
4月	2日	ゆいわかみやれいさい 由比若宮例祭	由比若宮
6月	3日	くずはらおか 葛原岡神社例祭	葛原岡神社
	第2日曜日	五所神社例祭	五所神社
	30日	おおはらえ 大祓	鶴岡八幡宮ほか
7月	第1日曜日～第2日曜日	てんのうさい 天王祭	こゆるぎ 小動神社
	12日以前の一週間	極楽寺八雲神社例祭	熊野新宮
	第2土曜日から3日間	八雲神社例祭	八雲神社（大町）
	第2日曜日から第3日曜日	八雲神社例祭	八雲神社（山ノ内）
	第2日曜日から第3日曜日	八雲神社例祭	山崎地区集会場
	第3日曜日から一週間	八雲神社例祭	八雲神社（常盤）
	25日	荏柄天神社例大祭	荏柄天神社

月日		祭礼名	場所
8 月	立秋の前日から 9 日まで	ぼんぼり（雪洞）祭 立秋の前日：夏越祭 ^{なごしさい} 立秋の日：立秋祭 ^{りっしゅうさい} 9 日：実朝祭	鶴岡八幡宮
	19～21 日	鎌倉宮例祭 ^{かまくらぐう}	鎌倉宮
9 月	14 日	甘縄神明宮例祭 ^{あまなわしんめい}	甘縄神明宮
	14 日～16 日	例大祭 14 日：浜降式、宵宮祭 ^{はまおりしき よいみやさい} 15 日：例大祭、神幸祭 ^{れいたいさい しんこうさい} 16 日：流鏝馬神事 ^{16にち やぶさめしんじ} 16 日：鈴虫放生祭 ^{16にち すずむしほうじょうさい}	鶴岡八幡宮
10 月	第 1 日曜日又は第 2 日曜日	絵筆塚祭	荏柄天神社
11 月	23 日	新嘗祭 ^{にいなめさい}	鶴岡八幡宮ほか
12 月	16 日	御鎮座記念祭 ^{ごちんざきねんさい}	鶴岡八幡宮
	31 日	大祓	鶴岡八幡宮ほか

※ 五所神社の例祭、小動神社の天王祭については、海との関わりが深いため、「海にまつわる歴史的風致」（128 ページ）に記載する。

a 鶴岡八幡宮における祭礼・行事

鶴岡八幡宮は、鎌倉幕府の守護神であり、鎌倉時代に最も重要な施設に位置付けられた神社である。

現在、境内やその周辺市街地では、通年で様々な祭礼・行事が行われている。鶴岡八幡宮は市内で最も訪れる人が多い場所であり、これらの祭礼・行事は、市民や来訪者、氏子や参拝者などを問わず数多くの人々が拝観・参列している。鶴岡八幡宮の祭礼・行事をとおして、鎌倉の歴史的風土や古都としての雰囲気を感じることができる。

(a) 正月に関連する祭礼・行事

(i) 歳旦祭

新しい年が明けたばかりの元日の午前5時より「歳旦祭」が行われる。歳旦祭は宮中及び全国の神社で行われる年頭の祭儀である。終了後の午前7時からは、舞殿にて神楽始式が行われ、八乙女やおとめの舞が奉仕される。

大正4年（1915年）1月1日の鶴岡八幡宮の社務日誌に、「新年一日祭りを歳旦祭と改称し執行す」と記されており、昔からの伝統的な行事であることが分かる。



写真2-62 歳旦祭

(ii) 手斧始式

1月4日には、「手斧始式」が行われる。手斧始神事式は古来より重要な工事に先立って行われていた。鶴岡八幡宮創建の際にも「造営事始ぞうえいことはじめ」という名で儀式が行われたというが、今日では鎌倉全体の工事始めという意味を込めて執行されている。この行事について、昭和24年（1949年）1月4日の鶴岡八幡宮保管の文献資料に「手斧始式を再興す」と記されている。二ノ鳥居より神職の先導のもと、鳶職とびしょくの木遣音頭きやりおんどとともに御



写真2-63 手斧始式

神木が段葛だんかずらを進む。御神木は舞殿の祭場に安置され、神職による神事が行われた後、鎌倉の建築業者が儀式の責任者である「検知けんち」他の諸役を奉仕して、中世さながらの道具と所作で儀式を行う。

(iii) 除魔神事

1月5日には「除魔神事」が行われる。午前10時より舞殿で神事が執行された後、その西側で装束に身を包んだ射手が大的を射る神事で、源頼朝が「御^お的^{まと}始^{はじめ}」「御^お弓^{ゆみ}始^{はじめ}」と称する武家の事始を行ったことに由来する。弓矢には古来より魔を退ける力があるとされる。なお、参拝者の多くが求める破魔矢もこのような信仰と伝統に基づくものである。神事に用いられる的は約156cmで、この神事が別名「大的式^{おおまとしき}」といわれるのはこのためである。この大的の裏に「鬼」という文字を封じ込めて約27mの距離から矢を射込む。その所作は古式に則って厳粛に行われる。この行事については、昭和21年（1946年）1月5日の鶴岡八幡宮所蔵の資料に、「弓始神事を除魔神事と改称し、執行す」と記されている。



写真2-64 除魔神事

(iv) 御判行事

また、元日より7日までの間、「御判行事」が執り行われている。御判行事とは、御神印^{ごしんいん}を額に押し当てることによって、病氣平癒^{へいゆ}、厄除、無病息災を祈念するものである。この御神印によって頭脳明晰になるともいわれ、受験を目前にした学生が行事所^{ぎょうじしょ}に並ぶ姿も見られる。この御神印は通常は本殿の奥、御神座近くに奉安されているが、



写真2-65 御判行事

正月の時期に限り、行事所に移される。御神印を受けた人には、牛王宝印神符^{ごおうほういんしんぶ}が授けられる。この神符には神威が込められており、古くは誓約書に使われていたものといわれ、鎌倉時代、戦場に向かう武士も出陣に際して、この御神印を授かったと伝えられている。この行事について、明治12年（1879年）1月3日の鶴岡八幡宮の社務日誌によると、「元始祭を執行す、四日迄御判璽拝戴を執行す」とあることから、この頃にはすでに行事として実施されていたことが分かる。

(v) 左義長^{さぎちょう}神事

1月15日には、正月に飾ったしめ飾り、古いお札やお守りなどを持ち寄り「お焚き上げ」をする行事、「左義長神事」が行われる。鎌倉では「ドンドンヤキ」、「サイトヤキ」など、地域によって様々な呼び方がある。以前は、市内の各地域にある道祖神^{どうそしん}や庚申塔などの決

まった場所で行われていたが、今では、人家が増えたため防火などの理由から、町中ではこのような火焚き行事を行えなくなり、鶴岡八幡宮のほか、鎌倉宮、八雲神社（大町）などの境内や公園で行われている。

この火で焼いた団子を食べたり、火にあたったりするとその年は病気にならない、書初めの紙を燃やした炎が高く上がると字がうまくなるなどといわれている。

一般的には、13 日には、米の粉で赤・白・緑の「まゆ玉」と呼ばれる小さな団子を作り、14 日の朝に、この団子やミカンを木の枝にさして神棚に供え、「堅く実が結ばれるように」とお参りしたものを15日に左義長の火で焼いて食べる慣わしがある。この行事について、昭和14年（1939年）の鶴岡八幡宮所蔵の資料では、「十四日に行いし古神札焼納祭を左義長神事と改称し執行す」とあり、写真からも、昔の左義長神事の様子を知ることができる。



写真2-66 左義長神事
(昭和38年(1963年))



写真2-67 左義長神事

(b) 例大祭

「例大祭」は、毎年9月14日から16日までの3日間行われる、鶴岡八幡宮における最も大切な祭事である。

『吾妻鏡』にも文治3年（1187年）8月に「十五日、癸未、鶴岡放生會也、二品御出、（中略）有流鏑馬（15日、鶴岡の放生會なり。二品（源頼朝）御出。（中略）流鏑馬あり）」との記述が残されており、この放生会と流鏑馬の始行が鶴岡八幡宮の例大祭の始まりとされている。

14日の早朝に神職が由比ヶ浜において禊（みそぎ）を行い、翌日に控えた祭りの執行を大神様に奉告する宵宮祭が行われる。15日の例大祭は、宮司以下神職、巫女、八乙女が奉仕し、大勢の参列者を迎えて厳（おごそ）かに執り行われる。同日の神幸祭では神輿（みこし）に神様を遷しし、数百m続く行列が若宮大路を歩く。最終日の16日には流鏑馬神事が行われ、多くの参拝者が訪れる。境内には三日間、鎌倉囃子（はやし）の音が流れ、参道の両側に店が並ぶ。また、茶会や舞踊・武道の奉納もある。

(i) 触太鼓 (9月12日)

例大祭の2日前、9月12日には「触太鼓」が市内に響き渡る。鶴岡八幡宮において一年で最も重要とされるこの例大祭の開催を広く知らせるため、太鼓を車に積み、神職が鎌倉全域を巡りながら打ち鳴らすものである。かつては牛馬車に太鼓を載せ、道々を練り歩いたという。

鎌倉における宗教的・歴史的中核である鶴岡八幡宮において、重要な祭礼である例大祭の開催を告げる触太鼓の音

は、氏子のみならず、地域の人々に、鶴岡八幡宮の神威がまちを巡り、祭りの始まりを知らせる合図となり、鎌倉が神聖な空気に包まれていく。太鼓の音からは、祭事を迎える高揚感や鶴岡八幡宮を中心とした信仰と歴史の連なりを感じることができる。

この行事は、昭和9年(1934年)9月14日の鶴岡八幡宮所蔵の資料に、「例大祭浜降式を再興す、触太鼓を始む、前夜祭を執行す」という記述が残っていることから、昔から行われている行事であることが分かる。



写真2-68 触太鼓

(ii) 浜降式 (9月14日)

14日の早朝、由比ヶ浜海岸又は材木座海岸に忌竹^{いみだけ}2本を立てて注連縄^{しめなわ}を張り、14日の早朝、宮司以下神職が白衣・白袴・白足袋をつけて海岸においてお祓いを行い、海中に入って身を清める禊^もを行う。その後、禊の印として藻塩草^{もしおぐさ}(海藻)を持ち帰り、境内各所に供える。夕方から祭を迎える儀式「宵宮祭^{よいみや}」を行う。



写真2-69 浜降式

「浜降式」の当日は、鶴岡八幡宮から若宮大路では白い装束に身を包んだ神職の列を、また、海岸では禊の儀式が行われている様子が見られる。前述の昭和9年(1934年)9月14日の鶴岡八幡宮所蔵の資料にも浜降祭が行われていた記述がある。

(iii) 例大祭 (9月15日)

『吾妻鏡』にも記載のある「例大祭」は、鶴岡八幡宮において一年で最も重要な祭事である。宮司以下神職と巫女、伶人^{れいじん}が歩調を合わせ、上宮に参進する。上宮では、宮司以下神職、巫女、八乙女が奉仕し、大勢の参列者を迎えて厳かに神事が執り行われる。神前には鈴虫も供えられ、秋らしい虫の音が響く。鎌倉にお



写真2-70 例大祭

ける鶴岡八幡宮の歴史や存在の重みを感じることができる。

9月16日の鈴虫放生祭では、舞殿において神事が行われたあと、鶴岡八幡宮境内にある柳原神池のほとりに鈴虫が放たれる。生命の尊さや季節に対する感性を大切に守り伝えるために始められた。

(iv) 神幸祭(9月15日)

例大祭が行われた日の午後からは、大神様を神輿に遷しして氏子区域を渡御する「神幸祭」が行われる。氏子が、神輿3基を上宮から担ぎ、宮司以下神職・錦旗・神馬・高張提灯・太鼓・盾・弓矢などからなる数百メートルの行列が、若宮大路を二ノ鳥居まで進む。

二ノ鳥居で御旅所祭が行われる。御旅所祭りでは、8人の少女によって、緑の千早と緋の袴という美しい姿で、「八乙女の舞」が奉される。昭和33年(1958年)の写真からは、当時の神幸祭の様子を知ることができる。

この行列は、長さが250mほどにもなり、若宮大路沿いを渡る荘厳な行列は、古くから伝わる儀式の重みを伝えるとともに、氏子や地域が一体となって例大祭を盛り立てる活気も感じられる。



写真2-71 神幸祭(境内)
(昭和33年(1958年))



写真2-72 神幸祭(轎舎)



写真2-73 神幸祭(若宮大路)
(昭和33年(1958年))



写真2-74 神幸祭(若宮大路)

(v) ^{やぶさめ}流鏑馬神事（9月16日）

馬に乗って弓を射ることを「騎射」という。騎射三物（流鏑馬、^{かさがけ}笠懸、^{いぬおうもの}犬追物）のうち流鏑馬は、馬を^は馳せながら（走らせながら）矢を射ることから「^やば^{うま}矢馳せ馬」と呼ばれ、時代が下るにつれて「やぶさめ」といわれるようになったと伝えられている。

鎌倉の流鏑馬神事は、『吾妻鏡』によると、源頼朝が文治3年（1187年）8月15日に鶴岡八幡宮の放生会で奉納した流鏑馬が始まりとされている。

鶴岡八幡宮では現在、4月の崇拝者大祭にて流鏑馬、9月の鶴岡八幡宮例大祭において流鏑馬神事が行われている。

まず舞殿で儀式を行い、「馬場入りの儀」として神職の先導で順序・作法を守って馬場を一巡する。その後、鎌倉武士の狩装束に身を整えた射手が、紅白の扇の合図で馬場に駆け込み、鏑矢を抜いて約70m間隔で3か所に立てられた正方形の杉板の的を次々に射抜いていく。続いて装束を軽装に改めた射手により、やや小形の的板を射る平騎射が十数騎十数番行われるのが例である。昭和34年（1959年）の写真からも、例大祭における流鏑馬神事の様子を知ることができる。

流鏑馬神事が行われる当日は、鶴岡八幡宮境内に多くの人々が訪れ、一射ごとに歓声が沸き上がり、地域の人々や参拝客の熱気を感じることができる。



写真2-75 流鏑馬神事(例大祭)
(昭和34年(1959年))



写真2-76 流鏑馬神事(例大祭)

(c) ぼんぼり（雪洞）祭

毎年立秋の前日の8月6日から8月9日まで開催される「ぼんぼり祭」では、鎌倉市内及び鶴岡八幡宮にゆかりのある文化人や著名人が揮毫した約400点の書画がぼんぼりに仕立てられ、楼門前から大石段、舞殿周辺、参道ほか鶴岡八幡宮境内に掲揚される。

昭和13年（1938年）に鎌倉文士たちの呼びかけにより、夏の間の海水浴客に鎌倉の山側の文化にも親しんでもらおうと、鶴岡八幡宮にぼんぼりを奉納し、並べたのが始まりである。現在も、鶴岡八幡宮では当時文士たちが奉納したぼんぼりの書画が保存されている。昭和13年（1938年）8月7日の鶴岡八幡宮所蔵の資料に「夏越祭を始む、雪洞を掲揚す、宮内省楽部による雅楽奉奏あり」とあり、ぼんぼり祭が始まった当初の様子に関する記述がある。

日没の少し前に、巫女の手により一つ一つのぼんぼりにあかりが灯される。すべてのぼんぼりが灯される頃には境内は暗くなり、ぼんぼりを見ようとする多くの人々で賑わい、石灯籠のほのかな明かりに照らされた参道段葛には、境内へと向かう浴衣姿の参拝客が行き交う。ぼんぼり祭は、鎌倉ならではの夏の風情を感じることができる風物詩の一つであるといえる。



写真2-77 ぼんぼり祭
(昭和33年(1958年))



写真2-78 ぼんぼり祭

この期間中、鶴岡八幡宮の「夏越祭」・「立秋祭」・「実朝祭」が執り行われる。

立秋の前日の8月6日には、夏を無事に越すことができたことへの感謝と来る秋の豊穡^{ほうじょう}を願う夏越祭が行われる。鶴岡八幡宮の源氏池のほとりで「古式祓」が行われた後、参道で「茅の輪くぐり」を行い、舞殿にて疫病・災禍を祓い鎮めて天下泰平・五穀豊穡を祈る。神事では、巫女により「夏越の舞」が奉納される。



写真2-79 夏越祭
(昭和37年(1962年))



写真2-80 夏越祭

立秋の当日には立秋祭が行われる。夏の無事を感謝し、実りの秋の訪れを奉告する祭りである。

実朝祭は、源実朝の誕生日である8月9日に白旗神社にて執り行う祭で、実朝の遺徳^{いとく}をしのぶとともに、文芸に優れた実朝にちなみ、短歌会・俳句会が奉納される。

夏越祭で「茅の輪くぐり」が行われた後も、茅の輪が参道の中心に残され、一般参拝客もくぐることができるため、地域の人を含め多くの人が茅の輪を八の字でくぐる姿が見ることができ、鶴岡八幡宮で行われる神事が、地域の一般の人々にも根付いていることが感じられる。



写真2-81 実朝祭

(d) 祈年祭と新嘗祭^{にいなめさい}

「祈年祭」は、古くは「稔^{みの}り」を表す「とし（年）」を願う祭として「としごいのまつり」と呼ばれていたことから分かるように、春のはじめに一年の五穀豊穡を祈る祭であり、全国各地の神社で行われている。当日は、上宮に氏子などから献納された多くの農作物が供えられ、神事では巫女により「浦安の舞」が奉奏される。明治6年（1873年）3月2日の鶴岡八幡宮の社務日誌に、「祈年祭を執行す」とあることから、昔から行われていた行事であることが分かる。

これに対して、秋の収穫に感謝する祭が「新嘗祭」である。鶴岡八幡宮では、市内の農家から献納された稲をはじめ、野菜や果物などを神前に供え、神様に一年の五穀豊穡を感謝する。新嘗祭の当日は、上宮の楼門内には稲穂を束ねた「懸^{かけ}税^{ちから}」も供えられる。上宮では神職・巫女によって神事が執り行われる。明治8年（1875年）3月2日の鶴岡八幡宮の社務日誌に、「新嘗祭を執行す」と記述がある。

農耕民族であった日本人の精神性の源に通じる祈年祭と新嘗祭が、重要な神事であることを感じることができる。



写真2-82 祈年祭



写真2-83 新嘗祭

(e) まとめ

鎌倉幕府が開かれてから最も重要な施設に位置付けられていた鶴岡八幡宮は、地域と密接に結びつき、鎌倉を象徴とする存在となっていた。鶴岡八幡宮で行われる祭礼・行事は、古くは武家中心に氏子・崇拝者に大切にされ、近現代になってからは、鎌倉地域全体にも広く認知され、大切にされていることが分かる。

b その他の神社における祭礼・行事

鎌倉に在所ごとに神社があり、地域と密接に結びついている。

境内やその周辺市街地では、様々な祭礼・行事が行われている。これらの祭礼・行事は、氏子や参拝者などを問わず数多くの人々が参加、観覧している。神社の祭礼や行事を通じ、鎌倉の歴史的風土や、古都としての雰囲気・魅力を大いに感じることができる。

(a) 八雲神社（大町）の初神楽

大町の八雲神社では、年のはじめに際し、1月6日、世の平和と氏子の繁栄を願って神楽が奉納される。鎌倉における神楽は、鶴岡八幡宮の職掌^{しきしょう}と呼ばれる神楽男たちにより伝承されてきたが、鶴岡八幡宮が所蔵する文化13年（1816年）に作成された『文化度神器等焼失調書』には、八雲神社（大町）の神主が神楽を行う際に着用する装束も焼失した記録があり、鶴岡八幡宮に所属した神楽男のほかにも神楽を奉仕した神主家があったことが分かる。享徳3年（1454年）の奥書がある『鎌倉年中行事』には、6月7日に鎌倉公方足利成氏の屋敷へ八雲神社（大町）の神輿が渡御し、神楽を奏した奉幣^{さじき}の式が行われ、成氏一家は^{さじき}を構えて7日及び14日にこれを見ろとの記載があり、古くから神楽が伝承されていたことがわかる。『鎌倉大観』³³にも初神楽の記載がある。

当日境内に設けられた神楽の山は色とりどりの紙垂^{しで}で飾られ、大釜には湯が沸かされる。



写真2-84 かきゆ 掻湯



写真2-85 いはらい 弓祓

³³ 昭和28年（1953年）出版。鎌倉市観光協会作成。

まず社殿内において祭儀が行われた後、神楽へと移る。初神楽の次第としては、祈念の後、打囃^{うちはやし}、初能^{はのう}、御祓^{おはらい}、御幣招^{ごへいまねき}、湯上^{ゆあげ}、中入^{なかいり}、搔湯^{かきゆ}、笹舞^{ささまい}（湯座）、弓祓^{ゆぐら いはらい}（射祓）、剣舞毛止幾^{けんまい もどき}の十座が奉納される。最後の剣舞毛止幾では、舞の中で、ミカンや飴が撒かれる。

初神楽当日は、境内周辺で神楽の笛の音が聞こえるだけでなく、参列者に湯をかけるときやミカン等がまかれるときの歓声や笑い声も聞こえ、神楽が古くからの行事として地域の人々に親しまれ、楽しまれていることが感じられる。

鎌倉神楽は、市の無形民俗文化財に指定されており、この八雲神社（大町）の初神楽以外では、御霊神社の例大祭でも見ることができる。



写真2-86 剣舞毛止幾

表2-2 八雲神社(大町)初神楽での鎌倉神楽の次第

1	うちはやし 打 囃	神楽を執り行うことを神々に祈念し、一通りの楽曲を奏して調子を合わせ、奉仕者、参列者の心をたかめる。
2	はのう 初 能	白米を四方に散供し、神楽が滞りなく進行することを祈念し、清めの舞を奉納する。
3	おはらい 御 祓	斎場の四方と湯釜を祓い、旗を釜の両脇に立て、神酒を注いで清める。
4	ごへいまねき 御幣 招	うぶすなのおおかみ 産土大神・火の神・水の神を招く。舞の後、御幣を振り、神々の恩恵を参列者等に授ける。
5	ゆあげ 湯 上	清められた湯に笹を浸し、桶に湯を汲んで神前に捧げる。
6	なかいり 中 入	神楽の前段を終え、後段の神楽に備える。参列者は神酒を拝戴する。
7	かきゆ 搔 湯	煮え立つ釜の中を御幣でかき回し、引き抜いた際に跳び上がる「湯玉」で豊凶を占ったという。
8	ささまい ゆぐら 笹 舞（湯座）	湯に笹を浸し、これを振りかける所作を行う。飛び散った湯がかかると、一年間無病息災で過ごせるといわれる。
9	いはらい いはらい 弓 祓（射 祓）	四隅に矢を放ち、邪気を射祓う。最後に神座に向けて射定めるが、神座には悪霊がいなかったため、弦だけ引かれ、矢は収められる。放った矢を授かると運が開けると伝えられる。
10	けんまい もどき 剣舞毛止幾	赤と黒の天狗面を付け、鉾 ^{ほこ} を持った「剣舞 ^{けんまい} 」が、天下泰平を願い、邪気を払う。黒い山の神の面を付け、大きな杓子を持った「毛止幾 ^{もどき} 」が途中から現れ、天狗の所作を真似るなど、滑稽な動きで笑いを誘い、雰囲気のを和ませる。散供されたみかんを食べると風邪を引かないといわれる。

(b) 荏柄天神社の初天神祭（筆供養）、絵筆塚祭と例大祭

鶴岡八幡宮の北東に位置する荏柄天神社では、1月25日に「初天神祭」という祭事を行い、あわせて筆を焚き上げる「筆供養」が行われている。

荏柄天神社の祭神、菅原道真は学問の神として全国的に信仰され、毎月25日は「天神の日」とされており、その年初めての縁日である1月25日は「初天神祭」と呼ばれ、合格祈願のお札を求める人や、^{えま}絵馬を納める人などが多く訪れる。荏柄天神社所蔵の総代山田一雄の日記として昭和30年頃から昭和50年頃まで書かれた『荏柄天神社日誌』には、昭和32年（1957年）、昭和49年（1974年）にそれぞれ初天神祭や筆供養を行っていたことが分かる記述がある。

まず社殿で祝詞奏上^{のりと}などの諸次第を執り行った後、参道にて筆の焚き上げを行う。参道中央に置かれた梅鉢と呼ばれる青銅製の鉢に、参拝者が持参した使い古しの筆を組み、^{さいしゅ いみび}斎主が忌火を点火する。筆の霊を供養し、学力の向上や字の上達を祈る行事である。

同じく筆を供養する祭事として、10月には「絵筆塚祭」が行われる。1月の筆供養とは異なり、昭和・平成の時代に活躍した「漫画家集団」ゆかりの「かっぱ筆塚」と「絵筆塚」の前で祭事が行われる。鳥居から続く旧参道には、毎年漫画家諸氏が奉獻する「まんが絵行灯」が並び、日暮れからは点灯して、参道を温かく照らす。境内では、漫画家による似顔絵ブースやかっぱ絵コンクールなどの催しも行われる。当日は、特別な神事を見ようと多くの人が参詣する姿が見られる。

また、同社の「例大祭」は、毎年7月25日に行われる祭典と直近日曜日の神幸祭からなる。神職と氏子崇敬者により、神恩感謝^{しんおん}と地域安寧の祈りが捧げられる祭事である。

同社の神輿は、かつて二階堂にあった熊野神社の神輿が享保4年（1719年）に引き継がれたもので、境内を出てから覚園寺、瑞泉寺、第二小学校裏を通る。『荏柄天神社日誌』（山田一雄総代）には、昭和47年（1972年）7月23日に神輿の出る様子



写真2-87 初天神祭・筆供養

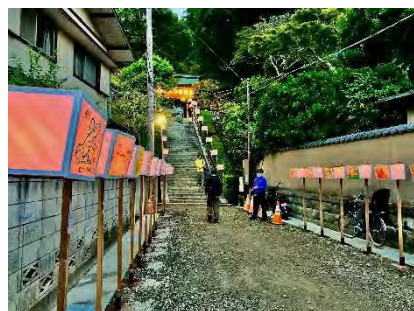


写真2-88 絵筆塚祭



写真2-89 絵筆塚祭



写真2-90 荏柄天神社例大祭

や同年7月25日には、例大祭が盛大に行われたことが分かる記述がある。鎌倉らしい社寺や自然を背景に神輿が練り歩く姿からは、この祭りならではの活気や伝統を感じることができる。

(c) 銭洗弁財天宇賀福神社の初巳祭^{はつみさい}

巳の日は弁財天の縁日である。銭洗弁財天宇賀福神社において一年の初めの巳の日に行われる「初巳祭」では、金運上昇や商売繁盛などを願う参拝者により境内が賑わう。人々は社務所で線香とろうそくの入ったざるを受け取り、社に参拝した後、洞窟内の霊水で銭を洗って帰る。霊水で洗った銭を有効に使えば、銭が数倍に増えて手元に戻ってくるといわれる。

切り立った崖と深い谷に囲まれた鎌倉特有の地形の中、岩盤をくり抜いた洞窟で行われるこの習わしは、自然と信仰が融合した鎌倉らしい光景を生み出しており、訪れた人が神聖な静けさの中で銭を洗う姿を見ることができる。

『鎌倉祭事記³⁴』には、初巳祭に関する記述があり、鎌倉の伝統的な行事であることが分かる。

(d) 丸山稲荷社・佐助稲荷神社の初午祭^{はつうまさい}

京都の伏見稲荷大社を総本宮とする全国の稲荷社では、春の農作業開始を前にして、2月の初午の日に豊作を祈願し、巫女の舞を奉納する「初午祭」が行われる。鎌倉市では、佐助稲荷神社や丸山稲荷社の初午祭において氏子や崇敬者で賑わう。



写真2-91 丸山稲荷社 初午祭

丸山稲荷社では、厳かな祝詞奏上や、神様への捧げ物などの神職による神事が行われた後、巫女によって神楽が奉納される。境内にあるのぼり旗やきつねの赤い胸当てはこの日に新しいものに替えられる。また、佐助稲荷神社では、神職による神事、神楽の奉納が行われる。

当日の境内周辺では、神楽の音楽が鎌倉の自然に溶け込み、鎌倉ならではの厳かな空気を感じることができる。

『鎌倉の年中行事³⁵』には、丸山稲荷社及び佐助稲荷神社の初午祭の記述があり、歴史ある行事であることが分かる。

³⁴ 昭和46年(1971年)発行。御所見直好著。

³⁵ 昭和43年(1968年)出版。鎌倉市観光協会作成。

(e) 由比若宮の例祭

由比若宮では4月2日には氏子等の参列のもとで「例祭」を行っており、祭主は鶴岡八幡宮の宮司以下神職が奉仕する。

明治39年（1906年）4月3日の鶴岡八幡宮の社務日誌に、「由比若宮例祭を執行す」とあることから、昔から行われている行事であることが分かる。

普段は、材木座のまちの中にひっそりとたたずむ由比若宮だが、この日は氏子等が多く集まり、神事の厳粛な空気を感じることができる。



写真2-92 由比若宮例祭

(f) 葛原岡神社の例大祭

葛原岡神社では、日野俊基の命日である6月3日にあわせて「例大祭」が行われる。本殿で祝詞を読み上げる神前祭と、日野俊基墓前で祝詞を読み上げる墓前祭が行われる。

6月の第1日曜日には、触太鼓・神職・^{からびつ}唐櫃・役員・手子舞・山車・子供神輿・大人神輿の行列が、由比ガ浜・佐助地区周辺を渡御する。太鼓が鳴り響き、行列や神輿が渡御する様子は神社の由来や伝統を感じられるとともに、周辺地域の一大行事として、まちが一体になり祭りを盛り上げる熱気も感じることができる。前日の土曜日には、宵宮祭として、神輿の夜間渡御も行われる。

写真2-93 葛原岡神社例大祭
(昭和50年代)

『鎌倉大観³⁶』には、当時から葛原岡神社の例大祭が行われていたことが記載されており、古くからの伝統的な祭りであることが分かる。

葛原岡神社の例大祭を皮切りに、鎌倉の各地で夏の祭りが始まる。

³⁶ 昭和28年（1953年）出版。鎌倉市観光協会作成。

(g) 天王祭（祇園祭）
てんのう ぎ おん

市内に数か所ある八雲神社に代表されるように、鎌倉には牛頭天王ごずてんのうやスサノオノミコトを祀る神社が多く見られ、夏には各所で「祇園祭（天王祭）」が行われる。鎌倉地域では「お天王さん」といえば神輿のことである。神輿の巡行にあわせて歌われる「天王唄」は、鶴岡八幡宮創建の際に「伊勢音頭（木遣音頭）」を唄いながら用材を浜から運んだことに端を発し、今に唄い継がれているといわれている。

祇園祭えきぎょうの行われる旧暦6月は疫病流行の兆しをみせる時であり、また、農村では稲に害虫が付きやすい時期でもある。このころに牛頭天王をまつり、鎮めようとしたのが始まりである。

なお、牛頭天王とスサノオノミコトは同一視されており、現在、市内では複数の八雲神社や腰越の小動神社などがスサノオノミコトを祭神としているが、その中で現在も続いている代表的な祭は次のとおりである。

なお、小動神社の天王祭については、海との結び付きが深いことから、「海にまつわる伝統行事にみる歴史的風致」（138 ページ）において記載する。

(i) 熊野新宮の八雲神社（極楽寺）例祭

7月に入ると、八雲神社（極楽寺）の「例祭」のため、極楽寺地区は神輿一色の1週間を迎え、内3日ある神輿渡御の際には、多くの担ぎ手が「ドッコイ・ドッコイ」と掛け声を挙げ、太鼓の音も相まって大いに賑わう様子にこの地域ならではの夏の訪れを感じることができる。

『鎌倉大観³⁷』にも、熊野新宮の八雲神社（極楽寺）例祭は記載されており、歴史のある地域の行事であることが分かる。

(ii) 八雲神社（大町）神幸祭

八雲神社例祭で執り行われる「神幸祭」は、古くは7月7日と14日の両日に行われていた。享徳3年（1454年）の奥書がある『鎌倉年中行事』には、6月7日に鎌倉公方足利成氏の屋敷へ神輿が渡御し、神楽を奏した奉幣の式が行われ、成氏一家は棧敷を構えて7日及び14日にこれを見るとの記載があり、室町時代にはすでに執り行われていたと考えられる。



写真2-94 八雲神社例祭(大町)
神幸祭

³⁷ 明治35年（1902年）出版。鎌倉市観光協会作成。

現在の行列は、囃子車（鎌倉囃子）、大太鼓、猿田彦、神主、総代、一番神輿の順に行列をなし、この地域を練り歩いた後、辻の神酒所で待機していた3基の神輿とともに4基の神輿が神社へと進んでいく。この際に氏子の乳幼児が保護者に抱かれて神輿の下をくぐり、無事な成長を祈願する「みこしくぐり」の信仰が今も行われている。

夜になると4基の神輿は独特の「神輿ぶり」を披露することとなる。お祓いを受けた揃いの袴天姿の担ぎ手によって、掛け声とともに提灯を付けた4基の神輿は勢いよく進み、途中一旦停止した4基の神輿が横一列になって再び動き出す。担ぎ手も拝観する者も「悪疫退散招福繁盛」が約束されると語り継がれている。4基の神輿が連結する勇壮華麗な様子は全国でも珍しく、鎌倉らしい夏の風物詩として、この地域ならではの賑わいを感じることができ、訪れる人々を楽しませている。

(iii) 八雲神社（山ノ内）例祭

山ノ内の八雲神社は、もとは「牛頭天王社」と称したと伝わり、「例祭」は中断されていた時期もあったが、昭和42年（1967年）ごろから再開した。古くから山崎の八雲神社の神輿とともに巡行していたことから「出会い祭」、「行合祭」などと呼ばれ、7月中旬に行われている。『新編相模国風土記稿』の明治8年（1875年）の写本にも例祭に関する記述がある。

山ノ内の神輿は男神輿、山崎の神輿は女神輿と称され、それぞれの地域を出発した後、北鎌倉駅前で出会う。しばらく山崎側にともに進み、神職による「出会い神事」が行われると、山崎の神輿に腹帯が巻かれる。神事が行われた後、また2基は共に進み、山ノ内の神輿が山崎の神輿を小袋谷まで見送ると、それぞれの地域に戻って行く。2基の神輿が出会うと、神輿の掛け声はより一層大きくなり、大勢に囲まれた2基の神輿を担ぎ手が左右に大きく揺らす光景を見ることができ、普段は閑静な住宅街が広がるこの地域が、例祭によって高揚感で包まれる様子が感じられる。

古くは御霊神社と同様に面掛行列が行われていたことから、これに用いられていた面と衣装（市指定有形民俗文化財）が伝わっており、例祭に併せて面の展示が行われていた。令和5年（2023年）からはこれらの面の複製を用いて面掛行列が行われるようになった。



写真2-95 神輿の出会い



写真2-96 女神輿(左)と男神輿



写真2-97 面の展示

(iv) 八雲神社（常盤）例祭

毎年7月に開催される常盤の八雲神社の「例祭」は、古くから継承される地域に根差した祭りであり、宵宮祭と本祭が行われる。『新編相模国風土記稿』の明治8年（1875年）の写本にも例祭に関する記述がある。

境内の石段に地元の子供会が制作した灯籠が飾られ、夜道を照らす。また、子供神輿と大人神輿が町内を練り歩き、多くの露店で賑わう様子に祭りの活気を感じられる。

(h) 鎌倉宮の例祭

「例祭」は鎌倉宮の最も重要な神事で、祭神護良親王が亡くなった日にちなみ8月19・20日に執り行われる。例祭の前夜に例祭前夜祭を行う。例祭後は例祭が無事に執り行われたことを祭神へ感謝を伝える神事である後鎮祭を行う。昭和41年（1966年）の写真から、昔から例祭が行われていたことが分かる。

また、夜には地域の人々による盆踊りや楽市、バザーが開催され、20日の昼のみ琵琶や琴・剣道などの奉納がある。特に盆踊りでは賑やかな音楽、人々のかけ声などが境内の外まで響きわたり、祭りの活気を感じられる。



写真2-98 鎌倉宮例祭
(昭和10年(1935年))



写真2-99 鎌倉宮例祭 盆踊り

(i) 甘縄神明宮例祭

長谷の鎮守である甘縄神明神社の「例祭」では、長谷町内の各所に神酒所が設けられ、神輿が据えられる場所もある。毎年、9月7日に假屋祭^{かりや}として、旧長谷消防署の横に假屋を設け、神輿の前で式典を行う。その後、長谷の東町、新宿、上町、仲町、大谷戸の5つの町内の神酒所を祓って回る。例祭は、例年9月7日から14日にかけて行われるが、近年では9月の第2日曜日に神輿が町内を巡行するのが通例となっている。前日の夕方には子供たちの囃子が響き、夜には氏子による囃子が演奏され、露店が立ち並び、ぼんぼりが連なる様子は祭りの高揚感を引き立てる。昭和45年(1970年)の写真から、昔からの伝統的な地域の祭りとして行われていたことが分かる。

神輿渡御の当日は、神輿は長谷の大通りを進み、由比ガ浜地区や坂ノ下地区の境、大仏のトンネルあたりまで進んだ後、再び神社へと戻る。子供たちが引く、花飾りを施した山車も祭りを彩る。神輿のかけ声が響き渡り、神輿に飾られたぼんぼりが人々の顔やまちを照らす様子は長谷の風景を一変させ、祭りの賑やかさを感じられる。



写真2-100 甘縄神明宮例祭のぼんぼり
(昭和45年(1970年))



写真2-101 甘縄神明宮例祭
神輿渡御

c まとめ

鎌倉の神社で行われる祭礼・行事は、氏子や地域の人々が深く関わっており、神社にとどまらず、その地域をあげて行われている。こうした祭礼や行事が行われている光景は、市内各所に神社があり、地域と密接な関係を築いている鎌倉ならではの光景である。

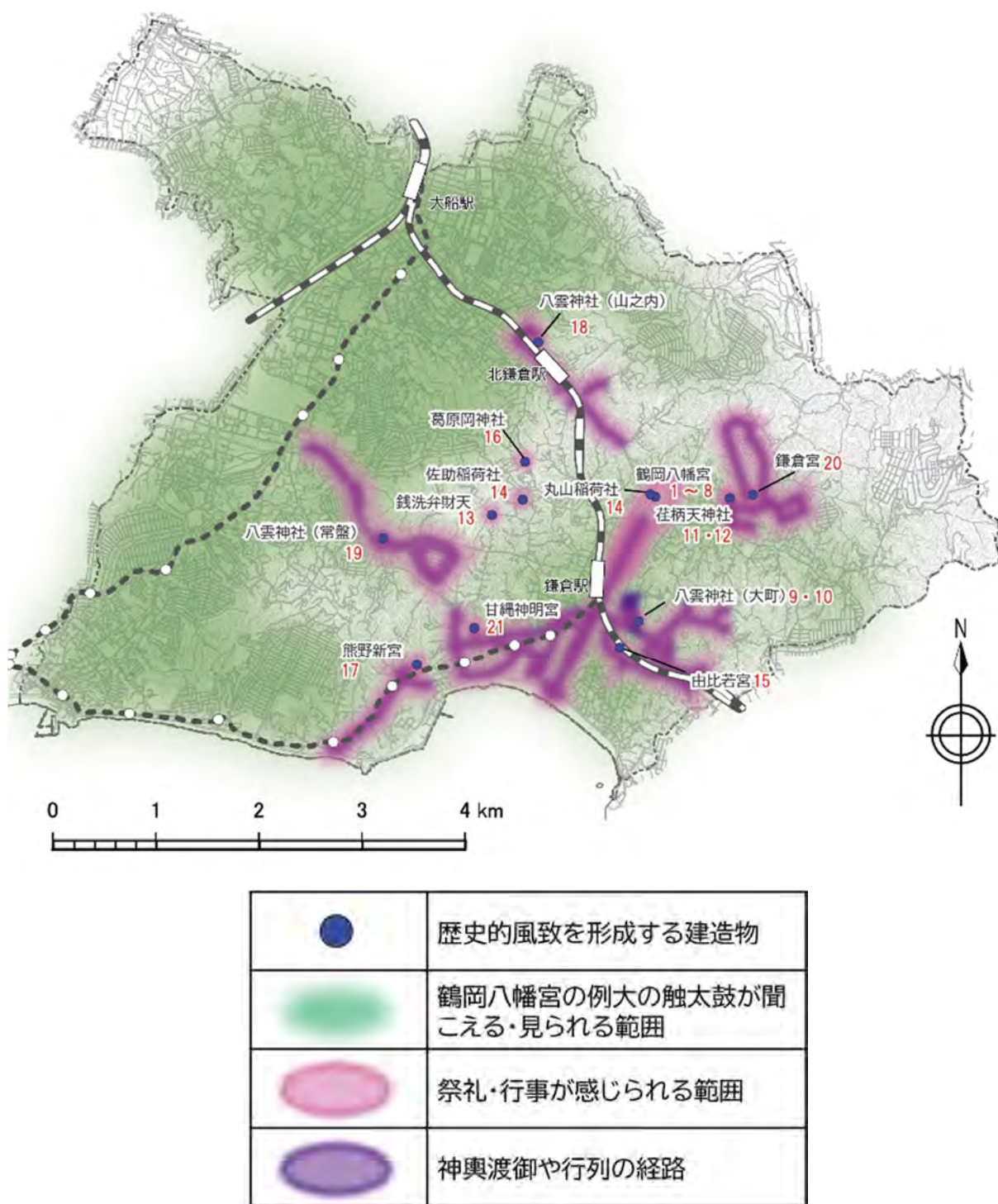


図2-8 神社における活動の市街地への広がり

※ 図中の祭礼・行事の図中番号は表2-3に対応している。

表2-3 神社における祭礼・行事の図中番号一覧

神社名称	祭礼・行事名称	図中番号
鶴岡八幡宮	歳旦祭	1
	御判行事	2
	手斧始式	3
	除魔神事	4
	ぼんぼり祭	5
	例大祭☆	6
	新嘗祭	7
	祈年祭	8
八雲神社（大町）	初神楽	9
	八雲神社例祭☆	10
荏柄天神社	初天神祭・筆供養	11
	荏柄天神社例大祭☆	12
銭洗弁財天宇賀福神社	初巳祭	13
佐助稻荷神社・丸山稻荷社	初午祭	14
由比若宮	由比若宮例祭	15
葛原岡神社	葛原岡神社例祭☆	16
熊野新宮	極楽寺八雲神社例祭☆	17
八雲神社（山ノ内）	八雲神社（山ノ内）例祭☆	18
八雲神社（常盤）	八雲神社（常盤）例祭☆	19
鎌倉宮	鎌倉宮例祭	20
甘縄神明宮	甘縄神明宮例祭☆	21

※ ☆が付いている行事は図2-8に神輿や行列の経路を示している。

(ウ) 寺院における行事

寺院における行事について、一部を示す。

表2-4 寺院における行事等

月日		祭礼名	場所
1 月	13 日	ごまだ くよう 護摩焚き供養	こくうぞうどう 虚空蔵堂
	16 日	えん ま えんにち 閻魔縁日	えんのう じ 円応寺
	22 日	たい し こう 太子講	ほうかい じ 宝戒寺
	28 日	はつ ふ どう 初不動	みょうおういん 明王院
4 月	4 日	ときむねこうまいさい き 時宗公毎歳忌	円覚寺
	8 日	こうたん え 降誕会（花まつり）	各寺
	8 日	にんしょうとう 忍性塔特別参拝	極楽寺
5 月	16 日	えん ま 閻魔縁日	円応寺
	23～24 日	開山毎歳忌	建長寺
6 月	16 日	ずいけん 瑞賢忌	建長寺
7 月	15 日	かじわら せ が き 梶原施餓鬼	建長寺
	23～24 日	地藏まつり	宝戒寺
8 月	10 日	くろ えんにち 黒地藏縁日	覚園寺
	10 日	し まんろくせんにちまい 四万六千日詣り	安養院・杉本寺・長谷寺
	16 日	えん ま 閻魔縁日	円応寺
	旧暦 7 月 15 日	せ が き え 施餓鬼会	各寺
10 月	2～3 日	かいさんこく し まいさい き 開山国師毎歳忌	円覚寺
	12～15 日	じゅう や お十夜	光明寺
	13 日	え し き お会式	日蓮宗の各寺
11 月	文化の日を含む 3 日間	ほうもつかざ い 宝物風入れ	建長寺・円覚寺
12 月	18 日	歳の市	長谷寺

a 禅宗寺院における祭礼・行事

鎌倉時代後期に伝来する禅宗は鎌倉幕府の保護を受け、鎌倉で発展する。京都に先立ち、建長寺が中国（南宋）の五山制度に倣い、五山の一つとなり、その後、室町時代の元中・至徳3年(1386年)、足利義満が京・鎌倉五山の制度を定め、これに移行していく。これらの社寺は、いつの時代も権威と威厳をもって脈々と鎌倉の文化を支え、継承してきた。境内地は公開されており、数々の講座も開催される。境内では1年を通じ様々な仏教行事が行われており、住民や来訪者、参拝者などを問わず数多くの人々が観覧している。こうした人々は、それらを通じ、鎌倉の歴史的風土や古都としての雰囲気や魅力を大いに感じている。

(a) 建長寺・円覚寺における開山毎歳忌・開山国師毎歳忌

5月23日と24日に建長寺で行われる「開山毎歳忌」は、開山の蘭溪道隆の法要で、23日の午前10時には、山門の楼上で羅漢講式という特別法要が行われる。午後2時になると、梵鐘の鐘の音が響いて全山の僧が仏殿に集まり、読経が始まる。安置されている蘭溪道隆像を輿に乗せて白衣の8人が担ぐ。御詠歌講中の御詠歌が唱えられ、たくさんの信者が手を合わせ、見守る中を、僧衆の鳴らす銅鉦鼓や太鼓などの楽奏の先導で、僧の行列が静かに奥の法堂に蘭溪道隆像を運び入れる。

24日には法要に引き続き、方丈で正式な食作法による「四ツ頭」の斎座が厳かに執り行われる。また、「万人講施餓鬼会」も営まれる。新盆の家の霊や先祖の霊を慰めるもので、多くの参拝者が訪れる。午後になると、僧が法堂に揃い、堂内外の鐘が高く低く響く「打ち合わせ」の後、読経が行われ、前日と同じように蘭溪道隆像を法堂から仏殿に戻す。昭和45年(1970年)の写真から、昔から開山毎歳忌が行われていたことが分かる。



写真2-102 開山毎歳忌(建長寺)

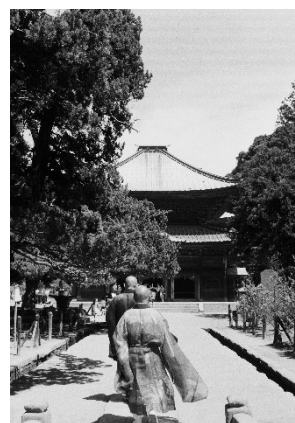


写真2-103 開山毎歳忌(建長寺)

(昭和45年(1970年))

円覚寺で行われる「開山国師毎歳忌」は、円覚寺開山の無学祖元を供養する法要で、10月2日から3日に行われる。10月3日には本山や末寺から多くの僧や信者が集まり、舍利殿や仏殿で無学祖元の法要を盛大に行う。10時前になると国宝の洪鐘おおがねが打たれ、法要の始まりを告げる。法要は、まず、舍利殿りょうごんしゅうで楞嚴呪りやうごんしゅうという経を歩きながら唱える行道が行われ、仏殿に移動し、また読経を行う。その後、方丈で、無学祖元の掛け軸を掲げて靈膳をお供えし、参列した僧が開山とともに厳粛に会食する、「四ツ頭」という儀式を行う。



写真2-104 開山国師毎歳忌(円覚寺)

『鎌倉祭事記』³⁸には、昔から建長寺及び円覚寺が開山忌を行っていたことが分かる記載がある。

(b) 円覚寺の洪鐘おおがね弁天堂大祭

円覚寺の「洪鐘おおがね弁天堂大祭」は60年に一度、原則として庚子かのえねの年に開催される伝統的な祭礼である。『快元僧都記』の「天文九年三月六日条」(1540年)によると、古くは文明12年(1480年)に行われていたことが記録されている。近年では、令和5年(2023年)に開催された。

写真2-105 洪鐘弁天堂大祭
(令和5年(2023年))

洪鐘の鑄造成功に感謝した第九代執権北条貞時は、円覚寺に弁天堂を建立し、江島神社の弁財天を勧請して円覚寺の鎮守とした。円覚寺と江島神社の弁財天は「夫婦弁天」と称され、弁財天と洪鐘を祀る洪鐘弁天堂大祭では円覚寺と地域の人々に加えて江島神社も参加する。

洪鐘弁天堂大祭では円覚寺弁天堂に祀られている弁財天の御神体を乗せた山ノ内八雲神社の大神輿が、鎌倉街道沿いを練り歩く。その他にも、稚児行列、面掛行列、洪鐘の張子、地元小学生の行列など、様々な団体が参加し、壮大なパレードを繰り広げる。特に、面掛行列は、明治時代の祭礼の様子を描いた明治34年(1901年)成立の『円覚寺弁天堂洪鐘祭行列図(板絵)』にも描かれており、歴史的な風情を感じさせる。

(c) 建長寺・円覚寺における宝物風入れ

「宝物風入れ」は、毎年11月3日の「文化の日」の前後に、建長寺と円覚寺で行われる恒例行事で、両寺の宝物を、虫干しを兼ねて一堂に展示する。宝物風入れの起源は、江

³⁸ 昭和46年(1971年)発行。御所見直好著。

戸時代まで遡ると伝わる。

なお、鎌倉国宝館が寄託を受けている宝物については、この期間両寺に返却されるが、『鎌倉国宝館庶務日誌』の昭和5年（1930年）11月14日の項に「円覚寺宝物風入ニ陳列ノタメ…自働車ヲ雇ヒ左記ヲ同寺ニ運搬セシム」、同月17日の項に「宝物風入ノタメ一時返戻シタル国宝ヲ再ビ本館ニ搬入ス」と詳細な記述があることから、鎌倉国宝館の建設当初から同様のやりとりが行われていたことが分かり、社寺と博物館が連携してきた歴史をたどることができる。

期間中、建長寺では、創建以来750年にわたる国宝、重要文化財など宝物約150点の展示を行い、円覚寺では収蔵している数百点の文化財の展示と「国宝舍利殿特別公開」を行っている。人々は、展示されている国宝・文化財などの宝物の豊富さにより、臨済宗本山である2つの寺院の存在感を実感できるとともに、鎌倉における禅宗の歴史を再認識できる。



写真2-106 宝物風入れ(建長寺)



写真2-107 宝物風入れ(円覚寺)

b 鎌倉の寺院におけるその他の仏教行事

(a) 護摩焚き供養

虚空蔵堂では、虚空蔵菩薩を本尊^{ほんぞん}として毎年1月13日に「初護摩焚き」と呼ばれる護摩焚き供養を実施している。

初護摩焚きは、11時と14時の2回にわたって約30分ずつ厳修している。申し込みをした参拝者の護摩札^{かじ}を加持し、1年の安泰、知恵と福德を願い、煩惱の浄化と仏の加護を祈る。通常非公開である本尊が身近に感じられる貴重な機会となる。



写真2-108 初護摩焚き

堂外にも読経と護摩の炎の気配が漂い、通りすがりの人々も自然と足を止める様子が見られ、静かな日常の中に立ち現れる神聖な空気を感じることができる。

『鎌倉祭事記』³⁹には、初護摩焚きの記載があり、昔から行われている行事であることが分かる。

³⁹ 昭和46年（1971年）発行。御所見直好著。

(b) 閻魔縁日

円応寺では、毎年1月16日、5月16日、8月16日に「閻魔縁日」が営まれている。地獄の蓋が開くとされるこの日に、檀家や信者によって執り行われ、餓鬼道に堕ちた霊を供養する法要となる。1月16日は大般若会、5月16日は大施餓鬼会といい、多くの僧が本堂に集まり儀式が行われる。8月16日は水施餓鬼会といい、経木塔婆を



写真2-109 閻魔縁日(水施餓鬼会)

桶に供え、水をかけて先祖供養を行う。閻魔縁日の日には、読経の声が木立のあいだから聞こえ、境内に入らずとも閻魔王坐像を祀る寺ならではの伝統が感じられる。

『鎌倉祭事記』⁴⁰には、閻魔縁日の記載があり、昔から行われている行事であることが分かる。

(c) 太子講

聖徳太子は、仏教の興隆に尽くすとともに、飛鳥時代における国家制度や文化の基礎を築いた人物である。その中でも、特に法隆寺の建立をはじめとする寺院建築に深く関わり、建築・木工・彫刻などの技術者集団の精神的支柱とされてきた。以来、太子は工匠の神と仰がれ、とくに社寺建築に関わる職人の間で篤い信仰を集めるようになった。

宝戒寺では、毎年1月22日に「太子講」が開かれ、地域の職人や商工関係者を中心に、技術の向上・商売繁盛・家内安全を願う護摩供養・読経・木遣唄の奉納が行われている。堂内に充満する香煙と読経・木遣唄の響きは、信仰と技術が交わる場としての深い意味合いを帯びている。門前にまで香の匂いが立ちこめ、古くからの伝統が感じられる。昭和43年(1968年)の写真からも、昔からの行事として地域の人々を含めて大切にされていたことが分かる。



写真2-110 太子講

(昭和43年(1968年))



写真2-111 太子講

⁴⁰ 昭和46年(1971年)発行。御所見直好著。

(d) 初不動

明王院では、不動明王の縁日である毎月 28 日に本堂で護摩焚き供養が行われている。中でも 1 月 28 日の護摩焚き供養は「初不動」と呼ばれ、一年の無事や息災を祈り、護摩の炎で御加持された護摩札を求めて多くの人々で境内が賑わう。

明王院は、鎌倉幕府の祈願所として鎌倉時代から護摩焚き供養が行われてきた。『鎌倉祭事記』⁴¹にも初不動が紹介されている。

護摩焚きの熱気や経を読む声、人々の活気が門前にも広がり、長く受け継がれてきた祈りのかたちが、今もこの場所に息づいていることを感じられる。



写真2-112 護摩焚き供養の様子



写真2-113 初不動の様子

(e) 降誕会

「降誕会」は「花まつり」・「灌^{かんぶつえ}仏会」・「仏^{ぶつしょうえ}生会」・「竜^{りゅうげえ}華会」・「誕生^{たんじょうえ}会」などといい、釈迦が生まれた 4 月 8 日に各寺院で行われる。この行事は、釈迦が生まれたときに天から竜が下^{こうとう}って来て香湯へ入浴させたという伝説がもとになっている。寺では花^{はな}御^み堂^{どう}という様々な花で飾った小さいお堂を作り、その中に甘茶をたたえた水盤を置き、中央に誕生したときの姿の釈迦像を安置する。参詣者はその釈迦像に甘茶をかけて入浴させる。寺ではたくさんの甘茶を作り、参詣者に分ける。



写真2-114 降誕会 花御堂(極楽寺)

鎌倉の寺院の中では、極楽寺の花まつりが特に著名である。

極楽寺においては、花まつりに併せ、奥ノ院にある極楽寺開山の墓である重要文化財

⁴¹ 昭和 46 年（1971 年）発行。御所見直好著。

「忍性塔」の特別公開を行っている。本堂の裏を出て住宅街を進み、階段を上った丘の上に忍性塔がある。忍性塔は高さ 3.9m の大型の五輪塔で、参拝者からはその大きさを見て感嘆の声が挙がる。特別公開の日には、山門前に「開山御廟特別参拝」「本尊御開帳」と書かれた大きな看板が出て、多くの参拝者が極楽寺の山門をくぐる光景を見ることができ、極楽寺の歴史と伝統を感じられる。

『鎌倉大観』⁴²にも、極楽寺や宝戒寺の花まつりについて記載されており、昔から行われてきた行事であることが分かる。

(f) 地蔵まつり

宝戒寺では、毎月 24 日に所願成就を祈念し、願い事を記した護摩木を焚く「本尊地蔵尊護摩供」を行っている。中でも 7 月 24 日は本尊地蔵尊護摩供だけでなく、本尊地蔵大施餓鬼会が行われ、読経や法要の声が境内に響く。当日は山門の外にも護摩焚きの匂いが漂い、読経の声が響き、道行く人々にも静かな祈りの場の気配が感じられる。

『鎌倉大観』⁴³にも地蔵まつりの記載があり、昔から行われてきた行事であることが分かる。

(g) 施餓鬼会・黒地蔵縁日

餓鬼とは仏教上の言葉で、生前欲張り^{むさぼ}で食べるように食べていた人が死ぬと行くといわれている餓鬼道に生まれ変わった者をいう。餓鬼は常に飢えと乾きに苦しみ、食べ物や飲み物を手に取ると火に変わってしまうので決して満たされることがないといわれる。そのような餓鬼や、供養する人がおらず無縁となった霊に食べ物や飲み物を施し、経をあげる法要を「施餓鬼会」という。



写真2-115 覚園寺 黒地蔵縁日

(昭和 42 年(1967 年))

施餓鬼会の日、寺では施餓鬼壇に亡くなってから初めて迎える新盆^{にいぼん}の人の位牌^{いはい}と、先祖代々や無縁仏の位牌を飾り、新鮮な野菜や果物をあげて供養する。新盆のときは三角の袋に米を入れ、ほかに麻ひも・ぞうり・扇子をこの世に戻る旅の支度として備えるところもある。

鎌倉では、8 月 10 日に「黒地蔵縁日」として行われる、覚園寺の施餓鬼会が特に著名である。同日、黒地蔵（重要文化財木造地蔵菩薩立像）の縁日も行われる。昭和 42 年(1967 年)の写真から、昔から黒地蔵縁日が行われていることが分かる。

⁴² 昭和 28 年(1953 年)出版。鎌倉市観光協会作成。

⁴³ 昭和 28 年(1953 年)出版。鎌倉市観光協会作成。

黒地蔵縁日は、「くらやみ参り」とも呼ばれ、真夜中に、黒地蔵が祀られている地蔵堂で、亡くなられた方々の冥福と現在生きている我々の健勝を祈願する法要が行われ、大きな香炉に参拝者の捧げる線香の煙が盛んに上がる。参拝は早い時間帯ほど良いといわれており、暗いうちから朝参りをする人々の列を見ることができる。堂の奥に、^{しゃくじょう}錫杖と^{ほうじゆ}宝珠を持って立っている黒地蔵は、地獄に堕ちた罪人の苦しみを少しでも和らげようと、地獄の役人に代わって火を焚いたといわれ、そのために黒くすすけていて、いくら彩色しても一夜のうちに黒くなってしまうと伝えられており、「火焚き地蔵」とも呼ばれている。

(h) 四万六千日詣り

室町時代以降、月に一日設けられた「功德日」と呼ばれる縁日に参拝すると観音菩薩の多大なるご利益が得られるとの信仰が広がり、特に千日分の功德が受けられるとされた旧暦7月10日の参拝は「千日詣り」と呼ばれた。さらに江戸時代になるとその御利益は四万六千日（約126年分）に相当するといわれるようになり、現在の鎌倉では、8月10日になると、早朝から杉本寺、長谷寺、安養院等をはじめとする市内の観音霊場を巡礼する「四万六千日詣り」を行う多くの人々を見ることができる。『鎌倉祭事記 史都の行事めぐり』⁴⁴に、四万六千日詣りに関する杉本寺、長谷寺、安養院の記載があり、昔から行われている行事であることが分かる。



写真2-116 四万六千日詣り(長谷寺)

(i) お^{じゅうや}十夜

「お十夜」は、10月12日の午後から15日の朝まで続けられる盛大な念仏会^{ねんぶつえ}で、鎌倉では光明寺で行われる。

お十夜は、もともとは宮中で行われる行事であったが、光明寺の観譽祐崇が、宮中での十夜法要を勤めたことにより、後土御門天皇が光明寺で十夜法要を行うことを許したものである。

この十夜法要は平安時代に唐から比叡山に伝わったもので、「人間の住む世の中で、十日十夜の間念仏を唱えれば、仏の住む極楽にいて千年間修行を实践するよりもまさる。」という念仏会の教えを基にするものと考えられている。



写真2-117 お十夜

(昭和49年(1974年))



写真2-118 お十夜

⁴⁴ 昭和46年(1971年)発行。御所見直好著。

昭和 49 年（1974 年）の写真から、昔の行事の様子が分かる。

光明寺のお十夜は特に著名で、12 日午後の献茶に始まり、15 日朝の結願法要で終わる。
その間に様々な法要や説経、施餓鬼会や練行列、雅楽奉奏や稚児礼讃舞などが行われ、
境内には露店が並び、光明寺の歴史と行事の活気を感じられる。

(j) 歳の市

長谷寺では、本尊である十一面観音菩薩立像の 1 年の最後の縁日あたる、12 月 18 日に納めの観音として「観音御足参り」を行っており、この日は、1 年でこの日のみ、観音堂内陣に入り、長谷寺の本尊である十一面観音菩薩立像の足に触れ、お参りすることができる。

また、参道では、神棚、だるま、暦、熊手などの縁起物を中心とした正月用品などが売られる「歳の市」が行われる。かつては、鶴岡八幡宮などでも行われていたが、現在鎌倉市内に残るのは、長谷寺のみである。

1 年の締めくくりとして、参詣する人や歳の市で縁起物を買求める人が多く訪れ、年の瀬の活気を感じさせる鎌倉の冬の風物詩であり、鎌倉市教育委員会が昭和 46 年（1971 年）に刊行した『としよりのはなし』の中でも、歳の市が往時より大変な賑わいであったことが語られている他、昭和 38 年（1963 年）の写真からも、昔の様子が分かる。



写真2-119 歳の市
(昭和 38 年(1963 年))



写真2-120 歳の市

c まとめ

鎌倉時代に伝来した禅宗をはじめ、古くから鎌倉の文化や信仰を守り続けてきた寺院で行われる仏教行事は、鎌倉に住む人々や参拝者など多くの人に親しまれ、大切にされている。

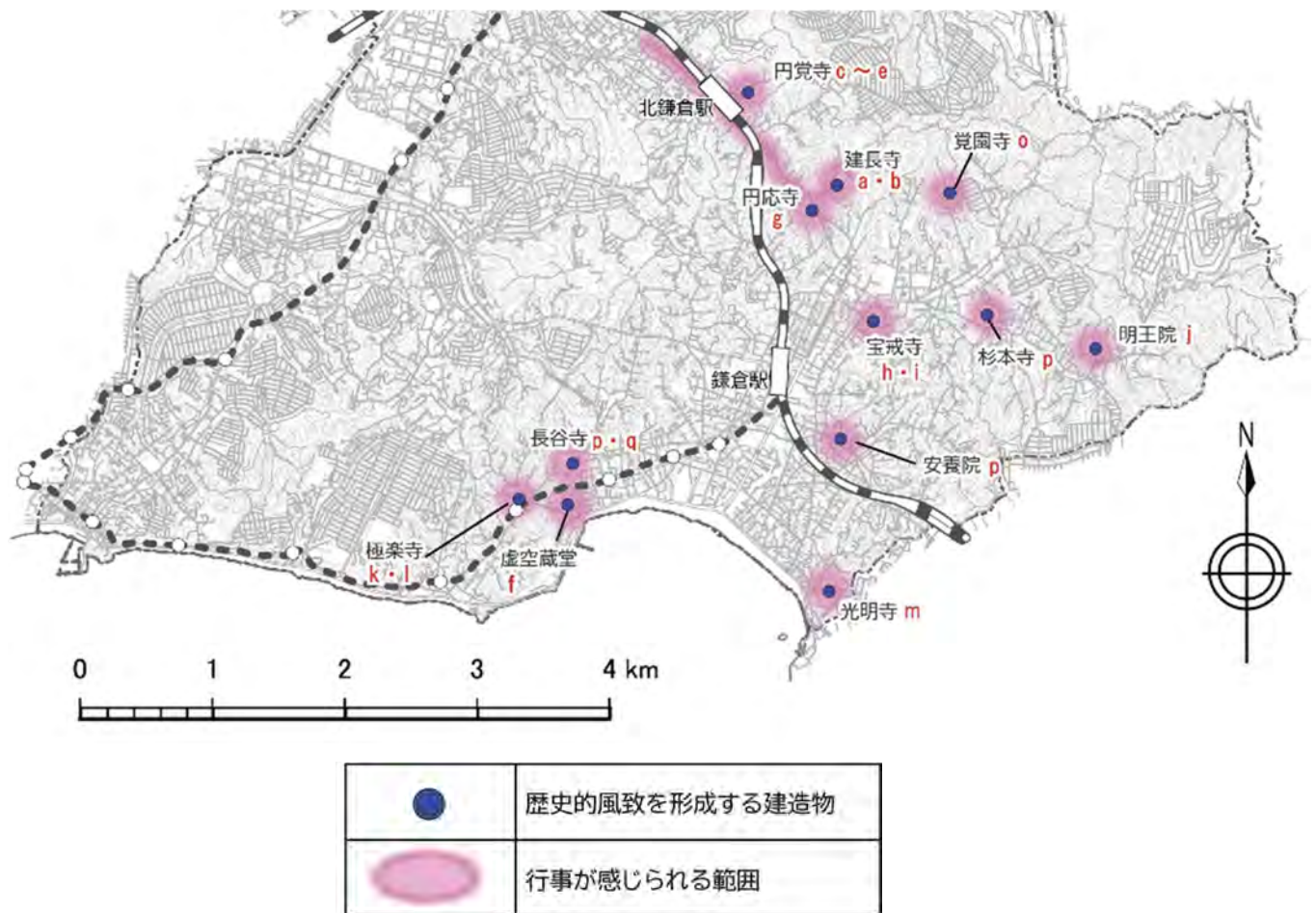


図2-9 寺院における活動の市街地への広がり

※ 図中の祭礼・行事の図中記号は表2-5に対応している。

表2-5 寺院における行事の図中記号一覧

寺院名称	祭礼・行事名称	図中記号
建長寺	開山毎歳忌	a
	宝物風入れ	b
円覚寺	開山国師毎歳忌	c
	洪鐘弁天大祭	d
	宝物風入れ	e
虚空蔵堂	護摩焚き供養	f
円応寺	閻魔縁日	g
宝戒寺	太子講	h
	地藏まつり	i
明王院	初不動	j
極楽寺	降誕会（花まつり）	k
	忍性塔特別参拝	l
光明寺	お十夜	m
覚園寺	黒地藏縁日	o
杉本寺・長谷寺・安養院	四万六千日詣り	p
長谷寺	歳の市	q

オ おわりに

源頼朝が現在の位置に鶴岡八幡宮を遷し、この場所を中心として各方面に延びる道路網を整備する中で、周囲の山稜部に造営した切通が交通の要衝として整備され、主要な街道の山際には多くの社寺が配置されていった。加えて、この時代の社寺は、幕府と強いつながりを持っており、周囲の山稜部に入組む谷戸が幕府関係者の領地であったことから、鎌倉各所の谷戸は境内地として開削^{かいさく}され、多くの寺院が建立された。一方、民衆の間で広がりをみせた宗派の寺院については、主に庶民の生活の場となる街中に境内地を確保し、寺院を建立していった。これらの社寺の多くは、大正 12 年（1923 年）の関東大震災や昭和 16 年（1941 年）に始まる太平洋戦争など、度重なる困難を乗り越え、今もなお「生きている歴史的遺産」として面的な広がりを見せながら、鎌倉の各所で宗教活動を続けている。

さらに、社寺は、一つの歴史的風致を形成する重要な要素であることだけに止まらず、次項以降で取り上げるように、古来この地で行われてきた生業に関連する伝統行事の担い手として、近世には参詣旅に始まる遊山の対象として、近代以降は別荘地や常住の地における古都の風情を醸し出す歴史的遺産として、戦後には緑地保全運動のきっかけの場として、それぞれの時代における人々の活動と密接な関わりを持ちながら、鎌倉における全ての歴史的風致の^{いしずえ}礎となっている。

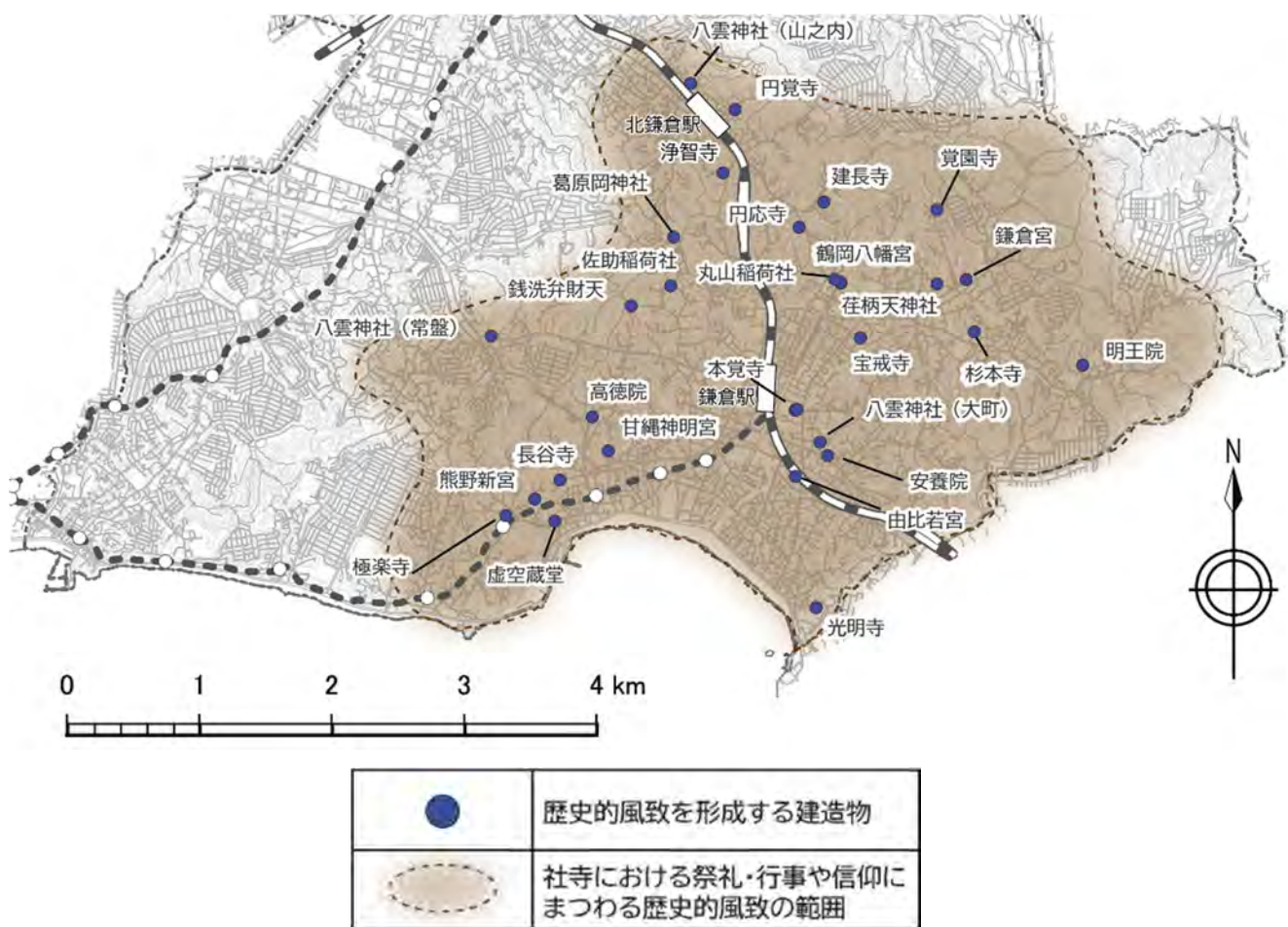


図2-10 社寺における祭礼・行事や信仰にまつわる歴史的風致の範囲

コラム 十日えびす

十日えびすの行われる本覚寺の境内は、鎌倉時代後期に成立したとみられる『吾妻鏡』に見られる^{えびすどう}夷堂の地といわれている。当初は天台宗の寺院であったが、日蓮がここに留まったことから改宗し、日蓮宗の寺院になったと伝わっている。

えびすというと、一般的にはにこやかな顔で右手に釣竿、左手に鯛を持っている姿で知られているが、本覚寺のえびすは源頼朝が幕府の守り神として祀ったもので、岩に腰をおろして手を合わせ、厳しい顔をしている。

鎌倉・江の島七福神の一つである「えびす神」をまつる本覚寺では、正月の三が日に「鎌倉えびす」、1月9日に「宵えびす」、10日に「本えびす」が行われる。

夷堂では祈祷の声が絶え間なく続き、金色の立烏帽子^{たてえぼし}を付けて美しく着飾った福娘の姿が境内のあちこちに見られ、福銭や神酒が参拝者に振舞われる。



写真2-121 鎌倉えびす

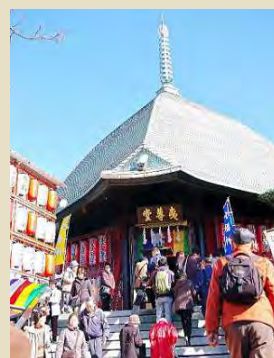


写真2-122 本えびす

コラム 宗教の垣根を超えた行事

「3・11 追悼・復興祈願祭」（主催：鎌倉宗教者会議）は、鎌倉の神道、仏教、キリスト教の3つの宗教関係者が協力して毎年3月11日に開催しているもので、平成23年（2011年）に起きた東日本大震災から1か月後の4月11日に鶴岡八幡宮で始まり、2年目以降は3月11日に開催している。開催の会場は3つの宗教の持ち回りで毎年変更となる。令和5年（2023年）は円覚寺、令和6年（2024年）はカトリック雪ノ下教会、令和7年（2025年）は鶴岡八幡宮で行われた。

また、葛原岡神社では、平成9年（1997年）から祭神である日野俊基を当社とその位牌を保管する浄光明寺が合同で、日野俊基を偲び、また、隠れた鎌倉の魅力を伝えていくために「日野俊基卿祭」を行っている。葛原岡神社や浄光明寺の関係者が一列になり、本殿、墓前を巡る行列は、宗教の垣根を超えた鎌倉ならではの光景といえる。

鎌倉には、神社・寺院・教会といった多様な宗教施設が比較的近接して集積しており、それぞれが長い歴史を背景にまちのなかに位置付けられている。宗教の垣根を越えて共に祈るという行為が、自然に成立している点は、鎌倉の宗教文化の独自性を物語っている。



写真2-123 日野俊基卿祭

(2) 海にまつわる歴史的風致

ア はじめに

鶴岡八幡宮の上宮に続く石段を上り、背後を振り返ると、南に向かって真っ直ぐに伸びる若宮大路と扇形に広がる市街地、その先に相模湾の水平線を見下ろすことができる。

古都保存法において「古都」と定められている10市町村のうち、海浜を有する都市は鎌倉市とその南東に位置する逗子市のみであり、緑豊かな自然環境、貴重な歴史的遺産と併せて海浜の風景が広がっていることで、鎌倉は古都の風格を保ちながらも開放感が漂い、訪れる人々に親しみを感じさせている。

江戸時代に入ると、和賀江嶋が位置する材木座と共に、坂ノ下、腰越、片瀬（藤沢市）、江の島（藤沢市）、新宿（逗子市）が「鎌倉六カ浦」と呼ばれ、日本橋の新^{しん}肴^{さかな}場^ば付^け属^{りょく}の漁場として徳川家康の入国以来種々の御役（義務）を勤め、その対価として人々は漁業権を保証された。

中でも江戸城をはじめ、藤沢宿、戸塚宿などに魚を献上することが最も重要な役であり、特に有名であった鰹は、鎌倉に水揚げされるとすぐに六^{ろく}丁^{ちょう}櫓^ろの早舟で江戸などに急送された。松尾芭蕉が「鎌倉を生きて出でけん初鰹」、山口素堂^{やまぐち そどう}が「目には青葉山ほととぎす初がつを」と詠んだことから、当時、鎌倉の鰹がいかに人々に愛好されていたかが分かる。こうした沿岸漁業は、近世以降、地域の活力ともなる生業として営まれ、現在は海産物の加工・販売なども含めた水産業として引き継がれている。

鎌倉海岸を拠点とする漁業者は、主に小型定置網、刺^{さし}網^{あみ}、しらす船曳^{ひき}網^{あみ}、みづき⁴⁵、わかめ養殖などの沿岸漁業を行っている。



写真2-124 鎌倉海岸と市街地



写真2-125 材木座漁師町(明治時代)



写真2-126 材木座での漁業

(昭和36年(1961年))

⁴⁵ みづきとは、鎌倉で古くから行われている漁法「硯突漁」に由来する。箱メガネという道具を使い、海中・海底をのぞき、長い竿で魚介類を獲る漁法である。

このうち、わかめ養殖は 11 月初旬に筏^{いかだ}を設置し、種糸を植込むところから始まる。漁期は2月初旬～3月末までで、釜ゆで、水洗い、天日干しの順に2日かけて行う。浜で湯がいて干すのが特徴で、天日干しの風景は冬から初春にかけての風物詩となっている。



写真2-127 わかめ干し

また、いわしの稚魚として知られるしらすについても、生しらす・天日干し・釜揚げしらす・タタミイワシとして加工し、直接販売する方法をほとんどの網元が行っている。

鎌倉の市街地に沿って弓なりに約2km続く鎌倉海岸（材木座から坂ノ下）は、海が遠浅で漁港がないことから、砂浜に漁具倉庫を建て、漁を終えるたびに滑車などを利用して漁船を砂浜まで引き上げている。このため、砂浜には漁を終えた漁船が並び、近世から営まれてきた沿岸漁業が今も続いていることを伝えている。

これに対して昭和39年（1964年）10月に開港した漁港を持つ腰越の漁業者は、定置網、刺網、しらす船曳網、一本釣り、採貝藻等の沿岸漁業を行うとともに、わかめ養殖の他、サザエ、マダイ等の種^{しゅびょう}苗放流を継続的に実施するなど、作り育てる漁業を推進している。

表2-6 主な漁法と漁期

時期	漁法
3月11日～12月末	しらす船曳網漁業
10月～4月	わかめ養殖（筏）漁業
11月～4月	みづき漁業
1月～12月	定置網漁業
1月～12月	たこつぼ・籠漁業
1月～12月	刺網漁業
1月～12月	一本釣漁業
1月～12月	遊漁案内業

漁業に関連した生業を営む人々が住む材木座、坂ノ下、腰越には、網元や船宿、鮮魚店の他、のりなどの海産物の販売店、新鮮な海の幸を使った料理を提供する飲食店などが軒を並べ、大通りから外れた路地には、漁師町の面影を残す昭和期の木造住宅等が点在している。こうしたまち並みを背景として、古くから漁業が生活に根付いているこれらの地域では、海に関連する様々な伝統行事が営まれている。



写真2-128 坂ノ下のまち並み(路地)



写真2-129 坂ノ下のまち並み(海を臨む)

イ 建造物

■ (ア) 和賀江嶋⁴⁶

鎌倉において、海にまつわる歴史を語る上で欠かせないのが、中世に建造された和賀江嶋である。和賀江嶋は、鎌倉海岸の東端に位置しており、日本に現存する最古の築港遺跡として史跡に指定されている。

島は陸部から東西方向へ約 240m、幅 100m にわたって延びており、その形は直径 40～50 cm の玉石を積み上げた築堤の様を呈し、陸部に横たわる巨大な岩石上には大正 13 年（1924 年）に鎌倉青年団が建立した史跡顕彰碑が見える。

古くからこの海岸は、和賀江又は和賀江津と呼ばれており、鎌倉幕府直轄の港として栄え、和賀江を含む湾には数百艘^{そう}の船が常に碇泊していたといわれている。しかし、大風による破損や転覆が多く、海岸が遠浅のため荷の揚げおろしに極めて不便であったことから、勧進 聖 人往阿弥陀仏^{かんじんしょうにんおう あ み だ ぶ っ}が船着場建造の必要性を幕府に説き、第三代執権北条泰時を中心として幕府がこれに協力した。貞永元年（1232 年）7 月 1 日に着工し、8 月 9 日に完成した和賀江嶋には、その後、関が設けられ、極楽寺が関米（税）を徴集して和賀江嶋の修築、維持管理を行うこととなり、中国や国内各地と文物や人の交流が行われる海の玄関口としても中世都市鎌倉の発展に重要な役割を果たした。

遠浅の浜辺に積まれた玉石が大潮の干潮時に全容をあらわし、漁船が係留^{けいりゅう}されているその風景は、史跡和賀江嶋が往時に港であったことを想起させる。



写真2-130 和賀江嶋
(昭和36年(1961年))



写真2-131 夕暮れの和賀江嶋



写真2-132 史跡指導標[※]と和賀江嶋

※ 史跡指導標とは、旧跡・史跡を顕彰するために建てられた石碑を指す

⁴⁶ 和賀江嶋のふりがなは、史跡としては「わかえのしま」であるものの、「わかえじま」や「わがえじま」と読む場合もある。



図2-11 史跡和賀江嶋指定範囲図

（イ）五所神社

五所神社は、明治 41 年（1908 年）に町内にあった三島神社の地に、八雲神社・諏訪神社・金比羅神社・見女八坂神社の 4 つの神社を合祀した神社である。合祀時に諏訪神社本殿を移建したものの、関東大震災の山崩れで埋没し、全壊した。現在の社殿は、昭和 6 年（1931 年）7 月に新築したもの⁴⁷で、入母屋造瓦葺屋根である。



写真2-133 五所神社

境内の神輿庫には、3 基の神輿が安置されており、「寛永十九年」（1642 年）の棟札がかかっている。

神輿庫の右手の小さな建物には「弘長二年」（1262 年）の年号が刻まれた板碑が完全な姿で残され、鎌倉時代の貴重な文化財として、昭和 16 年（1941 年）に国指定重要美術品に認定、昭和 46 年（1971 年）に市指定有形民俗資料に指定されている。境内には、「寛文十二年」（1672 年）の年号がある庚申塔などが 13 基ある。

その他に、大きな石を祀った三光尊石上稲荷（石祠は昭和 12 年（1937 年）4 月に建立）などがあり、海上安全の守護神として祀っている。

⁴⁷ 昭和 47 年（1972 年）に鎌倉市史編纂委員会が作成した『鎌倉市史 社寺編』（第三版）による。

(ウ) 小動神社

小動神社は八王子 宮、八王子大権現などと称されていたが、明治時代の神仏分離に際し、地名の小動をとって社名を小動神社と改称した。『八王子宫縁起』によれば、文治年間（1185～1189年）に佐々木盛綱が平家追討中、備州児島の戦いにおいて神のお告げを夢の中で感じ、大勝したことから、お礼参りのために長く尊崇^{そんすう}してきた八王子宫を勧請したことが起源といわれている。また元弘3年（1333年）5月、新田義貞が鎌倉攻めの折に戦勝を祈願し、後に祈願成就のお礼として剣一振に黄金を添えて寄進したことにより社殿が再興されたことから、新田義貞の功績を大いに称えている。

石造りの明神鳥居^{みょうじんとりい}の先に参道が伸びており、鳥居をくぐり、参道を進むと石段があり、2つめの石造りの鳥居が建っている。その右奥に社殿がある。現在の社殿は、拝殿の後方に幣殿^{へいでん}を張出し、さらに短い廊で本殿を繋ぐ権現造^{ごんげんづくり}の社殿がある。

本殿は文政2年（1819年）の建築⁴⁸とみられる。現在は一部改修されている。形式は、桁行三間、梁間二間の流権現造で、屋根は切妻造棧瓦葺となっている。拝殿は、関東大震災で破損し、昭和4年（1929年）に再建されたもので、これも改修されている。海に面した展望台があり、江の島、伊豆、箱根などを眺めることができる。



写真2-134 お正月の小動神社
(昭和49年(1974年))



写真2-135 小動神社

(エ) 御霊神社・石上神社

御霊神社は、海岸と並行に東西方向へ走る星の井通りから「力餅家」の角を曲がり、参道を進んだ山際にひっそりと佇^{たたず}んでいる。御霊神社の創建年代は明らかではないが、文治元年（1185年）にはすでにあったことが、『吾妻鏡』の記述に明らかであるため、鎌倉時代以前に遡ると推測される。



写真2-136 石の道標



写真2-137 力餅家

⁴⁸ 昭和62年（1987年）に鎌倉市文化財総合目録編さん委員会と鎌倉市教育委員会が作成した『鎌倉市文化財総合目録 建造物篇』による。

御霊神社鳥居の手前には、江ノ電の踏切が見える。江ノ電の踏切を渡って境内に入ると、入口に明神鳥居、入口東側に社務所と宝物庫がある。階段を上り、奥中央に社殿、それを挟むように東側に末社群、西側に神輿舎二棟がある。

社殿は、明治45年（1912年）の改築、大正3年（1914年）の竣工で、腰越の大工棟梁によるもので、銅板葺権現造である。昭和49年（1974年）の写真からも、現在と変わらない社殿の様子分かる。覆屋内の本殿は、貞享4年（1687年）の棟札がある。本殿の周囲には「かながわの銘木100選」に選定されたタブの木をはじめ、緑が生い茂り、社殿の裏に切り立つ崖が鎌倉特有の境内空間を形成している。

境内には、社殿の東側に石上神社が建っている。石上神社の御神体は、かつて由比ヶ浜の沖にあった石であり、小さな祠に祀られている。昭和40年（1965年）の写真と現在の写真を比較し、少なくともこの時期には現在の場所にあったことが分かる。



写真2-138 御霊神社の参道
(昭和49年(1974年))



写真2-139 御霊神社前を通る江ノ電



写真2-140 石上神社
(昭和49年(1974年))



写真2-141 石上神社



図2-12 御霊神社 境内図

ウ 活動

(ア) 海にまつわる伝統行事

a 五所神社・和賀江嶋での伝統行事

(a) 例祭

6月の第2日曜日に行われる五所神社の「例祭」では、古式に則った神輿の海上渡御が執り行われる。猿田彦や手古舞^{てこまい}の少女たち、囃子山車などの前導に続き、3基の神輿が五所神社を出発し、材木座のまちを威勢よく練り歩く。このうち三番神輿は、白張烏帽子を被った氏子たちによって「天王唄」を歌いながら担がれ、祭礼の古風な趣を今に伝えている。昭和44年（1969年）に鎌倉市が作成した『図説鎌倉回顧』に掲載の写真からも、例祭が昔から行われている伝統的な行事であることが分かる。

行列は光明寺の入口で化粧直しを行い、やがて材木座海岸に到着する。浜辺では、四方に竹を立て、注連縄を張った神聖な空間に3基の神輿が据えられ、神幸所祭が厳かに執り行われる。祝詞奏上の後、神輿と参集者、そして海へ向かっての祓いが行われる。続いて、三番神輿を浜に残し、残る2基が海へと入っていくという、神輿渡御の見どころが展開される。

例祭の日には、材木座のまちでは、「天王唄」や囃子の音、神輿の掛け声があたり一帯に響き渡り、祭りの活気と高揚感を感じられる。

また、神輿渡御は材木座海岸だけでなく、和賀江嶋や由比ヶ浜海岸からも、海へ進んでいく神輿とそれを担ぐ人々の熱気で普段は静かな海辺が一気に活気づく様子を見ることができる。この地域の人々も一大イベントとして神輿渡御の日には見物する人々で浜辺が埋まる。

(b) 潮まつり

1月11日の「潮まつり」では、材木座地区の海岸において、「潮神楽（鎌倉神楽、湯立神楽）」の奉納と「ドンドンヤキ（ドンドヤキ、左義長）」と呼ばれる正月のお飾りを焚き上げる行事が行われる。

当日は波打ち際からやや上がった砂浜に^{ござ}莫藁を敷き、四方に笹竹を立てて注連縄を張り、海に^{しおかぐら}対面して魚や野菜、神酒などを供えた祭壇を

設け、祭壇の隅にカマドを置いて神楽で使用する湯を沸かす。併せて祭場に隣り合う西



写真2-142 五所神社例祭



写真2-143 五所神社例祭

側の平地では、ドンドンヤキの準備が始まり、正月飾りやだるまを納める場所として四方に笹竹が立てられ、集まった人々は役目を終えた正月飾りなどを笹竹の内側に高く積んでいく。

全ての準備が整ったのち、関係者が席につくと、神事に先立ち、保存会によって天王唄が奉納される。揃いの法被はっぴを着た保存会の面々が祭壇の先の海を臨んで座り、声をそろえて天王唄を奉納し終わると祭儀が始まり、神職による祝詞奏上、関係者による玉串奉納に続き、いよいよ神楽が始められる。昭和40年（1965年）頃の写真からも、当時の潮神楽の様子が分かる。

鎌倉神楽は笛、太鼓で音頭を取りながら、打囃、初能、御祓、御幣招、湯上、中入、搔湯、笹舞（湯座）、弓祓（射祓）、剣舞毛止幾の演目が進められ、祭儀が終わると、すぐにドンドンヤキが始められる。

祭儀を終えたばかりの宮司が、積み上げられた飾りの山の前に立ち、湯釜の火を遷して火を点け、焚き上げを行う。火は点火された下部から上部へと燃え移り、その周りを取り囲む人々は皆、一年の無病息災や家内安全を願いながら、煙が高く上がっていく様子を見守っている。

「潮神楽」、「ドンドンヤキ」は、元々は漁師が主催する大漁祈願の儀式であったと伝えられており、現在では漁師の数が減ったことなどから、主催者は五所神社の氏子役員となっている。

なお、同日同時刻には坂ノ下海岸においても神事が行われ、神楽が奉納される。

神楽の奉納が行われる様子や、ドンドン焼きの様子を海岸沿いからも望むことができる。特に神楽の音は、波音とともに海沿いに響き渡り、周囲に祭りの情緒を漂わせる。音と風景が一体となり、地域に暮らす人々や訪れる人々にとって、海と結びついた信仰・文化を感じられる機会となっている。



写真2-144 潮神楽(材木座海岸)



写真2-145 材木座 潮神楽

(昭和40年(1965年)頃)



写真2-146 潮神楽(坂ノ下海岸)



写真2-147 ドンドンヤキ(材木座海岸)

b 小動神社天王祭

小動神社天王祭は、一般に「天王祭」と呼ばれており、7月7日・14日の両日にわたる祭礼であり、近年は14日に近い日曜日に行われている。この神事は、江戸幕府が編纂した地誌『新編相模国風土記稿』の明治8年（1875年）の写本に「六月十四日ニ天皇ノ祭事ヲ行ヘリ。」という記述があり、古くから行われている神事であることが分かる。

神事は、7日に近い日曜日の夕方に氏子区五か町（浜上、神戸、土橋、中原、下町）の囃子屋台が小動神社に集まり、総代及び祭典委員等が参列の上、神幸祭を執り行う。その後、出御、囃子屋台、賽銭唐櫃所後、神主、総代、神輿の順に行列を組んで氏子区五か町を練り歩く。午後7時には神社参道に設けられた御仮屋前に到着し、関係者一同による手締めの後、各町囃子屋台は解散し、それぞれの町内へ帰り、神輿は御仮屋内に安置して神幸祭を終える。

翌週日曜日の還幸祭では、江島神社の末社の八坂神社の神輿との行合祭が行われる。早朝から腰越町の花番（その年の当番）と下番（前年の当番）に当たる2町内の総代、祭典委員、囃子屋台が迎えの使いとして江の島に出向する。小動側は御仮屋前に各町の囃子屋台が集合し、総代、祭典委員、各町内代表が参列して御動座祭を執り行った後、町内を練り歩く。行列は、各町の囃子屋台、獅子頭、大榎、舂太鼓、賽銭唐櫃、神主、総代、神輿の順となる。一行は、まず浜上海岸に出て、四方に立てた竹に注連縄を廻らした所定の位置へ神輿を据え、神幸所祭を執り行う。祝詞奏上、御幣にて総代、祭典委員、参集者を祓った後、海に向い大きく祓う。そして、再び同行列は各町を練り歩き、下町海岸へと至り、同じく四方に立てた竹に注連縄を廻らした所定の位置へ神輿を据え、神幸所祭を執行する。次いで神輿は海の中まで担がれ、少しの間激しく揺さぶられた後、海から上がり引き続き町内を練り歩き、昼休憩を挟んで龍口寺前で八坂神社の神輿を出迎える。

江の島側の一行は、島での行事を済ませ、腰越側からの使者の迎えを待って、花番、下番の先導で金棒、高張り、通り囃子などの各囃子に太鼓、五所幟、提灯、天狗、神輿、総代、宮司等による行列を組んで腰越に入る。神輿が小動神社御仮屋前の祭庭に到着すると、両社の神輿が並んで据えられ、腰越側が準備した神饌を備え、神幸所祭が行われる。少しの休憩を挟んで再び一行は動きだし、夕刻に差し掛かった龍口寺の前で、腰越側の一行は横列に並び、江の島側の行列を見送る。この後小動の神輿はもと来た道を引き返し、一通りの神事を終えた後、役員一同の手締めで祭礼は終了する。



写真2-148 神輿(小動岬付近)



写真2-149 神輿(満福寺付近)

以前は、各町から飾り人形付きの山車5台が勢揃いして運行していたが、昭和37年(1962年)に山車が5台のうち4台が焼失してしまった。現在は、各町内会で再建をし、令和7年(2025年)には、浜上、土橋、中原の山車が神輿と巡行し、神戸と下町はそれぞれの町内で展示等が行われた。人形は浜上が義経と弁慶、神戸が八幡太郎義家と鎌倉権五郎景正、土橋が源頼朝と御所五郎丸、中原がスサノオノミコト、下町が神功皇后と武内宿禰である。

江ノ電の併用軌道の脇を神輿や山車が練り歩き、祭りの法被や浴衣姿の人々の合間を江ノ電が走る様子は腰越地域ならではの風景であり、夏の風物詩として地域の人に大切にされている。

c 御霊神社・石上神社の伝統行事

(a) 面掛行列

実りの秋を迎える頃になると、御霊神社では、鎌倉権五郎景政の命日である9月18日に「面掛行列」が行われる。この行事は、地域の豊年と豊漁を祈願し、子孫繁栄を願う祭で、神奈川県指定無形民俗文化財にも指定されているほか、「面と衣装(45点)」と「神輿」は市指定有形民俗文化財に指定されている。

9月18日当日は、面掛行列の前に「例祭」が執り行われ、「鎌倉神楽(湯立神楽)」が十二座、奉納される。神楽の基本的な構成は潮神楽と同じであり、社殿東側の平場に青竹を四方に立てて注連縄を張り、五穀豊穰を祈って神楽が奉納され、その後、面掛行列が始まる。

御霊神社の面掛行列の起源は定かではないが、天保12年(1841年)の『相模国風土記稿』に「例祭九月十八日巡行ノ儀アリ。祭祀ノ式鶴岡ノ巡行ノ式ニ倣ヘリ。祭器モ鶴岡ノ神器ニ模倣シテ造レリ」とあり、また、面裏の「明和五戌子年」の年代からも、200年以上前には行われていたことが明らかである。

神社と氏子の結びつきが強く、町内の氏子は祭のときに一軒で一役を受け持ち、奉仕するしきたりがある。



写真2-150 鎌倉神楽(御霊神社)



写真2-151 猿田彦



写真2-152 (左から)火吹男、
阿亀、女、福祿寿

行列は同心・金棒を先頭に、囃子連、^{のぼり}幟、^{しんぼうるい}神宝類、猿田彦、獅子頭が列をなして歩き、その後を^{はな}爺、鬼、異形、鼻長、^{なが}翁、^{ふくろくじゅ}烏天狗、福祿寿、^{お かめ}火吹男、阿亀、女の面の10人と神輿が行列を成し、ゆっくりと歩を進めていく。この内、妊婦役の阿亀のお腹は、豊年・豊漁の象徴として大きく膨らんでいる。



写真2-153 面の10人

最後の2人は女装であるが、全て男性が扮しており、前の8人は揃いの頭巾に赤い袴姿で、着物の上に赤や金の美しい模様が入った袖なしの羽織を着ている。阿亀は、大きくふくらませたお腹を両手で抱えながら歩き、産婆役の女が阿亀の腹をなでたり扇であおいだりと、おどけた動きをして見物人を笑わせる。この他、^{かり}狩衣に黒烏帽子の^{ぎぬ}宮司、神職たち、そして、^{かみしも}袴姿で白足袋を履き、^{すげがさ}菅笠をかぶった役員などを供とした行列がゆっくりと移動していく様は、往時の人々の願いが営々と続いていることを表している。

囃子の音色がまちに響き渡り、人々は阿亀と産婆役などの愛嬌のある所作や色鮮やかな装束を楽しむなど、200年以上続く伝統行事の神事としての厳粛さと行列を見る人々の活気が共存する独特の雰囲気を感じることができる。

面掛行列は、奈良時代に盛んであった仏教布教のための仮面劇である「伎楽」^{ぎがく}の面を用いて演じられるが、伎楽はその後衰退したため、現在伎楽の面を祭礼に用いる例は全国的に類を見ない。宝物館に保管されている市指定文化財の面には、明和5年（1768年）の年号があり、鶴岡八幡宮の祭りで「放生会」を行ったときに、舞楽面の行列があったものをまねて、坂ノ下村民が作らせたものだといわれている。その後、鶴岡八幡宮の行列は、江戸時代の終わりに面が焼失したことをきっかけに行われなくなった。また、山ノ内の八雲神社にも裏に天保11年（1840年）の銘がある面が残り、市指定の有形民俗文化財となっているが、こちらも現在行列は行われていない。このことから、御霊神社の面掛行列は大変貴重な文化財といえる。

なお、面掛行列の一行は、平成20年（2008年）に大韓民国の安東市で毎年開催されている「安東国際仮面舞フェスティバル」へ参加するなど、伎楽についての理解を深める活動も積極的に行っている。

(b) 石上神社例祭

石上神社の例祭は海の日（7月の第3月曜日）に行われる。例祭の当日は、まず御霊神社の境内に神輿を安置し、白い和紙の御幣を赤飯に立てた「ゴック（御供）」と神酒を供え、神事が執り行われる。次いで神輿は浜に運ばれ、再び神事を行った後に船へと移される。神輿と神職を乗せた船は、囃子方を乗せた漁船を従えて沖へと向かい、さらにゴックを片手に掲げた一人の若者が、十人前後を従えて船の後を泳ぎ追って行く。この一団が1 km 程沖合の石上神社に祀られた岩礁のあった場所に到着すると、神職が祝詞を奏上して^{さかさ}櫛を海へ投げ入れ、これを合図に泳いでいた者たちが、一口ずつゴックを食べた後、残りを海中に投げ入れて、海神に供えることで船の安全を祈願する。

第二次大戦直後まで地元住民の間では、祭礼が終わるまで海水浴をしない風習があったほどであり、石上神社の例祭は、海と共に暮らしてきた地域住民によって大切に受け継がれてきた祭礼である。昭和44年（1969年）に鎌倉市が作成した『図説鎌倉回顧』に掲載の写真からも、例祭が昔から行われている伝統的な行事であることが分かる。

例祭の様子は由比ヶ浜海岸周辺から眺めることができ、神輿を載せた船が沖へ向かう様子や、若者たちが泳ぐ姿は、海と共に暮らしてきた地域の歴史・伝統を感じることができる。



写真2-154 神輿と御供



写真2-155 沖へ向かう神輿

写真2-156 沖へ向かう神輿
(明治～昭和時代)

d 船おろし・船祝い

新年になって初めて海に漁船を出す日に行われる「船おろし（腰越地区では船祝い）」では、漁師たちが海岸へ出向き、大漁旗に飾られた漁船を勢ぞろいさせ、船を守る神様である「船霊さま」に大漁と安全を祈り、日ごろの海へのお礼と大漁への願いを込めて、船主がそれぞれ船の上から海の方へミカンや菓子まく。

材木座と坂ノ下では毎年1月2日 10 時頃から、腰越では毎年1月4日 8 時頃から始まるこの行事には、地域の人々の他にも、市内各所から大



写真2-157 船おろし(材木座海岸)

勢の見物客が集まる。砂浜に引き上げられた船の上から、海側の浜辺にいる人々にミカンや菓子などがまかれる際には、縁起物を受け取ろうと手を伸ばす様子や、方々からわき上がる参加者の歓声から、行事の活気を感じることができる。

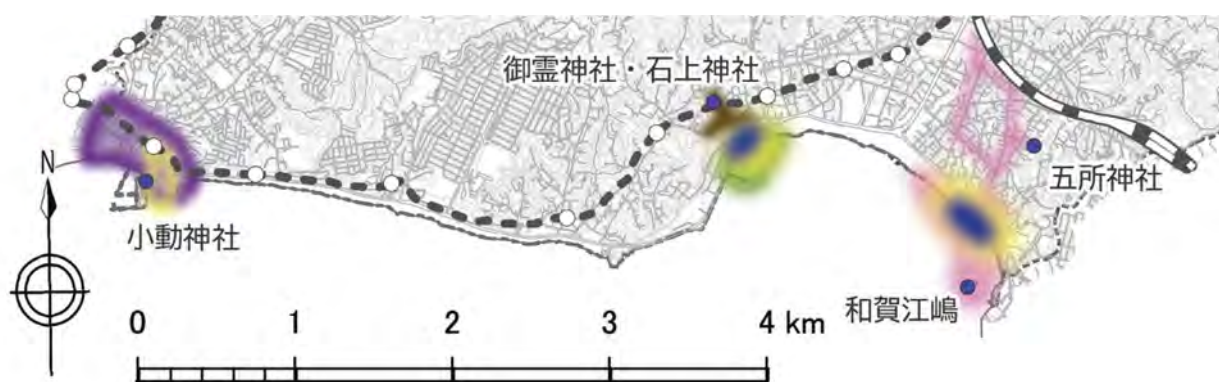
腰越漁港の船祝いとは、昭和46年（1971年）の写真から、昔から行われている行事であることが分かる。ミカンや菓子などをまき終わった後、漁師とその親戚縁者が乗船して新年最初の航海に出る。沖合の船上から江島神社、小動神社を遥拝^{ようはい}した後、腰越漁港に戻ってくる。海に浮かんだ船の上から初詣を行うという、海に面する古都鎌倉らしい正月の風景を見ることができる。



写真2-158 「腰越港の船祝」
(昭和46年(1971年))



写真2-159 船祝い(腰越漁港)



	歴史的風致を形成する建造物	
	伝統行事を感じられる範囲	五所神社 例祭
		潮まつり(潮神楽)
		小動神社 天王祭
		御霊神社 面掛行列
		石上神社 例祭
		船おろし・船祝い

図2-13 海にまつわる伝統行事の市街地への広がり

(イ) 鎌倉花火大会

鎌倉の花火大会は、昭和 24 年（1949 年）8 月 5 日の新聞に花火大会の開催を知らせる記事が載っていることから、70 年以上の歴史を持つことが分かる。昭和 60 年（1985 年）の新聞には、昭和 23 年（1948 年）に、鎌倉文士の一人であり当時の観光協会会長を務めていた久米正雄が、鎌倉に大勢の人を呼びたいと、催し物を模索していた中、花火大会の開催に至った経緯が記載されている。記事によると、当時は坂ノ下の埋め立て地が会場となっていた。戦後の復興と戦没者の鎮魂を祈って始まった鎌倉の花火大会は、鎌倉の夏を代表する風物詩として親しまれてきた。コロナ禍により一時休止されたが、令和 4 年（2022 年）7 月に再開され、多くの市民や観光客に再び感動を届けている。

花火の打ち上げは由比ヶ浜海岸沖約 400m に停泊させた打ち上げ用の船から行われる。中でも、鎌倉花火大会の象徴ともいえる水中花火は、海面に扇状に広がる幻想的な光景を創り出し、訪れた人々を魅了する。

毎年、多くの観客が市内外から訪れ、材木座海岸や由比ヶ浜海岸の砂浜は人々で賑わいを見せる。花火の音は鎌倉市内に響き渡り、その光は谷戸の奥深くにまで届く。花火の光が鎌倉の社寺や歴史ある市街地や周囲の山並みを照らし出し、社寺や市街地のシルエットが浮かび上がるなど、古都ならではの情緒ある風景が広がる。

とりわけ、海と山に囲まれた鎌倉ならではの地形や社寺・市街地が、花火の光と共に映し出される鎌倉らしい光景を見ることができ、まち全体が一体となった景観を構成している。鎌倉花火大会は、鎌倉の海・山稜・谷戸・まちなみが織りなす、夏の鎌倉らしい風物詩として、まちの景観的魅力の重要な一要素となっている。



写真2-160 鎌倉花火大会

(昭和 29 年(1954 年))



写真2-161 鎌倉花火大会



写真2-162 鶴岡八幡宮 一ノ鳥居

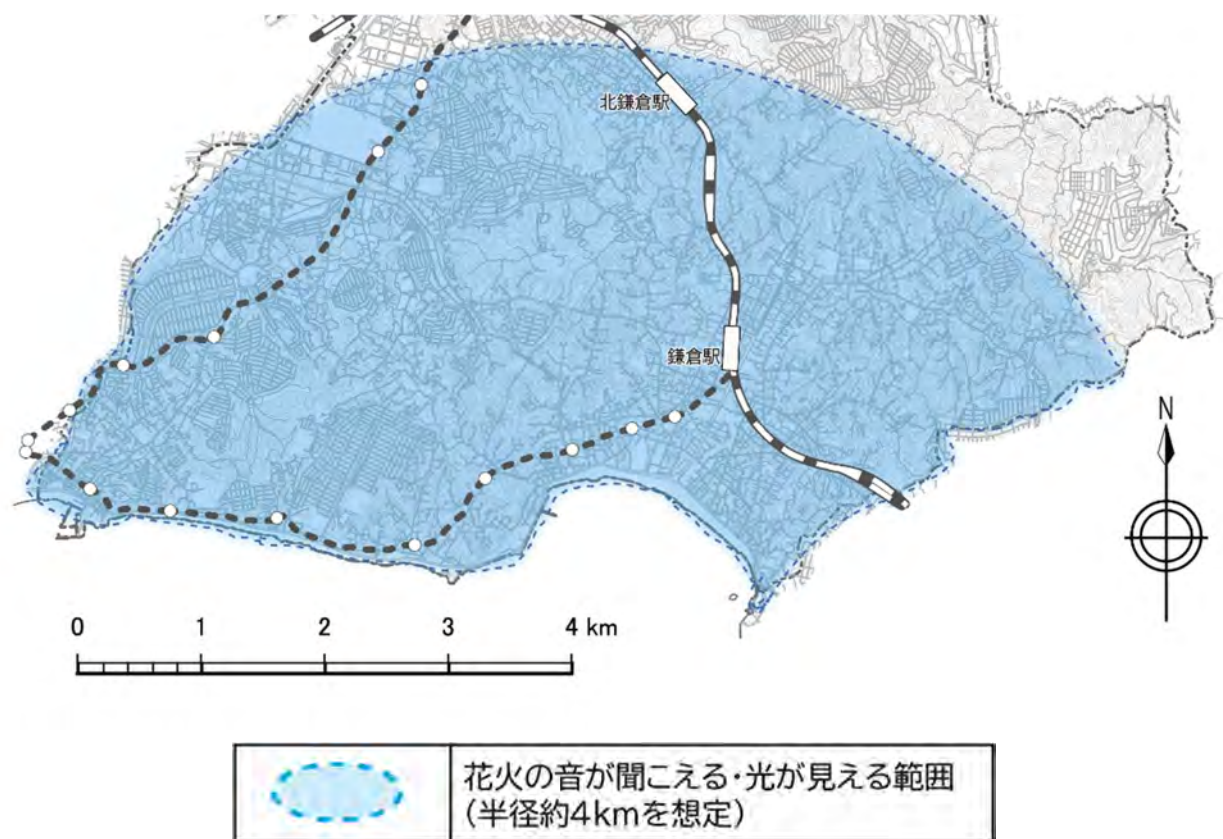


図2-14 鎌倉花火大会の市街地への広がり

※ 歴史的風致を形成する建造物は鎌倉の社寺・山稜及び市街地全体とする。

エ まとめ

鎌倉の海浜地域においては、沿岸漁業などの生業とともに、古来より神社仏閣との深い関わりの中で、漁の安全や豊漁を願う伝統行事が脈々と受け継がれてきた。これらの祭礼や神事は、地域の信仰や暮らしと密接に結びつき、海と共に生きてきた人々の営みを今に伝えている。また、地域の内外や訪れた人々との交流を育み、鎌倉の海辺に根ざした文化的景観を形づくっている。

こうした伝統に加え、現代においても夏の風物詩として親しまれている花火大会など、海を舞台とした行事が継続されており、地域の暮らしと海との結びつきが今なお息づいている。海岸に響く音や広がる光景は、古くからの風習や祭礼と同様に、鎌倉らしい海の景観の一部となっている。

このように、信仰・生業・行事が一体となって育まれてきた海と人との関係は、鎌倉の海浜地域における歴史的風致の重要な構成要素となっており、今日においてもその価値が継承されている。

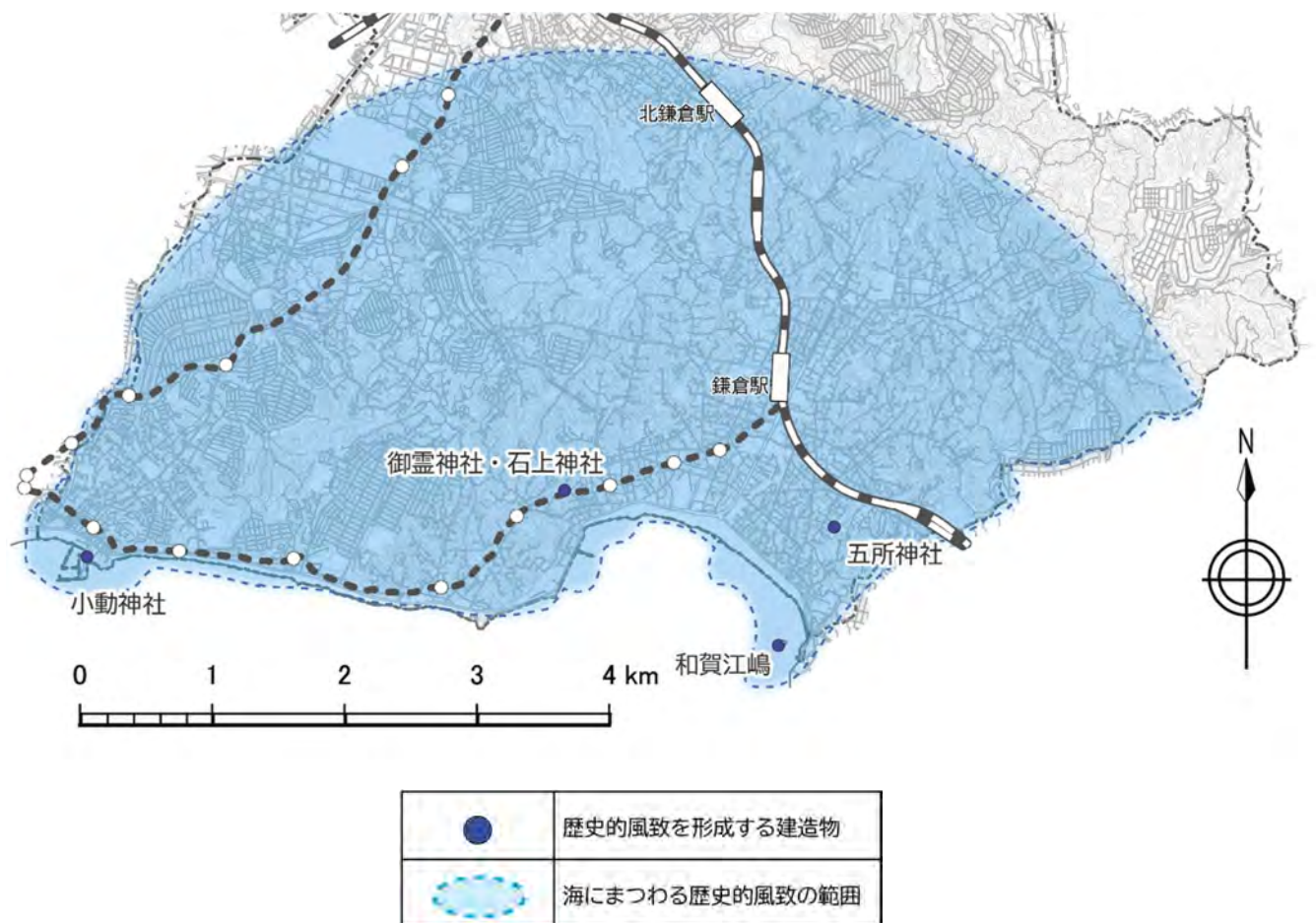


図2-15 海にまつわる歴史的風致の範囲